

京都府埋蔵文化財情報

第145号

京都府内における令和4年度の埋蔵文化財調査	森島康雄	1
研究ノート 畿内横穴式石室導入期における須恵器高杯の器形変化とその背景（下）	野島悠之	9
仕切り板を備える須恵器	名村威彦	21
首長居宅としての竪穴建物二態—古墳時代中後期の事例—	小池 寛	29
中世丹後の土師器皿	加藤雄太	37
資料紹介 城谷口古墳群出土のソケット式鉄鏃の類例についての覚書	中川和哉	45
令和4年度発掘調査略報		49
10. 立山古墳群	11. 佐屋利遺跡第3次	
12. カンジョガキ遺跡第3次	13. 堀城跡・堀北古墳群	
14. 女布遺跡第7次	15. 北野台遺跡	
16. 平野古墳群	17. 井手遺跡第7次	
18. 與能遺跡第2次	19. 西加舎遺跡第7次	
20. 柘榴川原遺跡		
長岡京跡調査だより・141		62
現地公開・普及啓発事業（令和5年1月～令和5年7月）		64
センターの動向（令和5年1月～令和5年7月）		66

2023年8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

京都府内における令和４年度の埋蔵文化財調査

森 島 康 雄

１．はじめに

令和４年度に当調査研究センターが実施した発掘調査は、契約数で15件、遺跡数で25遺跡を数える。なかでも亀岡市域の国営農地整備事業と高速道路延伸に伴う大宮峰山道路関係遺跡が大きな割合を占める。

本稿では、令和４年度に京都府内で行われた発掘調査の成果について、当調査研究センターが担当したものを中心に、時代ごとに概観する。

２．各時代の調査成果

（１）旧石器・縄文時代

縄文時代中期の平式土器で知られる^{へい}平遺跡(京丹後市丹後町平)では、国道バイパス建設に先立って発掘調査を実施した。1960年代に帝塚山大学と同志社大学が調査した平坦面から西に向かって下がる傾斜地で、縄文土器などを含む遺物包含層を確認した。包含層は縄文時代前期から古墳時代までの遺物を含む二次堆積層であるが、土器の磨滅は少なく、1960年代の調査地がある平坦面から流れ落ちてきたものと推定される(当調査研究センター)。

カンジョガキ遺跡(京丹後市大宮町^{すき}周^{おおみやめ}積)は大宮売神社北東の小さな谷筋に立地する。昨年度の調査では、A地区で縄文時代早期の土器を含む流路を検出した。流路の埋没時期は、放射性炭素年代測定により縄文時代前期中葉から末葉と推定される(当調査研究センター)。

（２）弥生時代

^{いくじ}幾地城跡(与謝郡与謝野町幾地)では、平地川左岸尾根の先端部に、堀切で画された郭を想定した調査区を設定したところ、弥生時代後期の土器が出土した。墓が営まれている可能性が高く、調査は次年度に継続して実施している(当調査研究センター)。

^{ひよしがおか}日吉ヶ丘遺跡(与謝郡与謝野町^{あけし}明石)では、旧桑飼小学校体育館跡地周辺から南北方向の環濠の一部を検出した。上部は削平されており、検出された幅は1 m、深さは最大1.5mであった。令和２年度に発見された環濠の外側をめぐると考えられるもので、日吉ヶ丘遺跡の集落が、少なくとも一部では２重の環濠を備えていたことが判明した(与謝野町教育委員会)。

（３）古墳時代

^{たつやま}立山古墳群(京丹後市弥栄町溝谷)では、北西方向に延びる尾根の先端部に立地する立山14・15号墳の調査を実施した。15号墳は、直径15m程度の円墳とみられ、大小２基の埋葬施設を検出した。尾根の主軸に直交する埋葬施設１は、長さ4.3m、幅2.0m、残存深0.7mの墓壇に、長さ3.0m、幅0.6mの棺を納めていたと推定される。短剣１点と鉄鏃と思われる鉄器数点が出土した。埋葬



京丹後市立山14・15号墳

施設の短側辺をわずかに切り込んで、長さ2.1m、幅1.1m、残存深0.7mの埋葬施設2が営まれていた。棺の規模は長さ1.0m、幅0.3mで、小児を埋葬したものと考えられる。遺物は出土しなかった。弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓と考えられる。

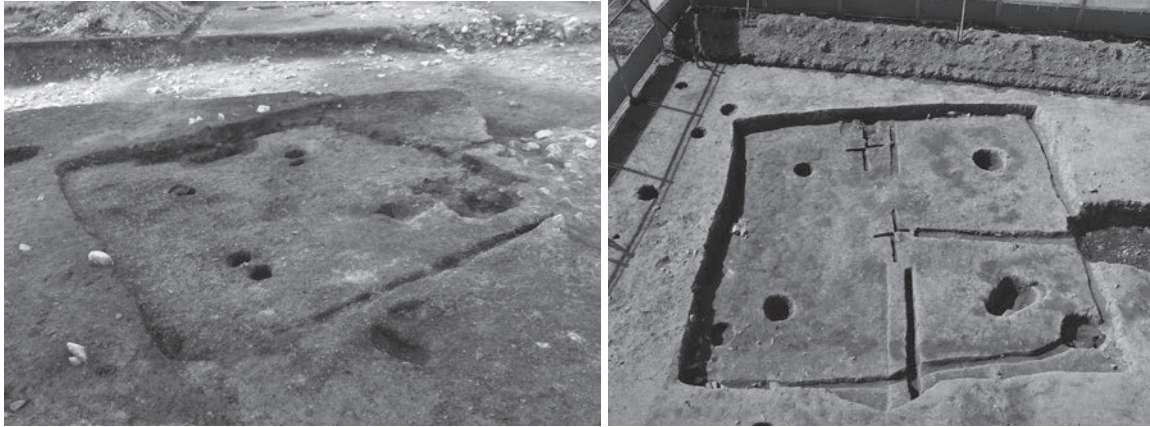
15号墳の尾根上方に隣接する14号墳は一辺10m程度の方墳とみられる。尾根の主軸に直交する2基の埋葬施設を検出した。墳頂平坦面中央に設けられた長さ2.3m、幅0.9m、残存深0.2mの埋葬施設1には、副葬品は認められなかった。埋葬施設1の長側辺の一部を切り込む形で平行して長さ2.8m、幅0.7m、残存深0.2mの埋葬施設2を検出した。棺蓋の上に副葬された鉄鏃数本と長さ約1.0mの鉄刀が出土した。土器は出土しなかった。古墳時代中期後半から後期前半の古墳と考えられる(当調査研究センター)。

カンジョガキ遺跡B地区で、古墳時代後期の堅穴建物を2基確認した。谷の斜面に営まれたために下方側を削平されている。このほか、丘陵斜面に営まれた横穴墓が数基確認された。調査は次年度に行うが、周辺は横穴墓群が卓越する地域であり、新たな横穴墓群の発見は注目される(当調査研究センター)。

^{おかのみや}岡ノ宮城跡(京丹後市大宮町周枳)第2次調査において、尾根先端で古墳が2基発見された。尾根頂部に築かれた古墳1は、墳頂平坦面に2基の埋葬施設の可能性がある遺構、南西側斜面に4基の埋葬施設が設けられている。古墳1の北東側斜面には、テラス状の平坦面を造成した古墳2が築かれ、2基の埋葬施設が設けられる。1基には短剣1点と鉄鏃数点が副葬され、もう1基には、勾玉2点、管玉4点、小玉3点が副葬されていた(当調査研究センター)。

^{とのお}外尾古墳群(京丹後市大宮町周枳)では28号墳の調査を行った。直径14m、高さ3mの円墳で、東に開口する横穴式石室を持つ。天井石の一部と羨道部は調査地外に延びることが判明した。協議の結果、設計変更により古墳全体が保存されることとなったため、調査を終了した(当調査研究センター)。

^{にしかや}西加舎遺跡(亀岡市本梅町^{ほんめ}西加舎)は、本梅川沿いの扇状地上に立地する遺跡である。今回の調



亀岡市西加舎遺跡(左)と同春日部遺跡(右)で見つかった古墳時代の方形竪穴建物



亀岡市法貴北5号墳の墳丘と石室内の様子

査では、古墳時代の竪穴建物SH10北辺東側に設けられた貯蔵穴から、大阪湾岸産の製塩土器がまとまって出土したことが特筆される。遺跡は摂津と丹波を結ぶ街道沿いに位置しており、この街道を介した大阪湾岸との交流を示す資料である(当調査研究センター)。

法貴北^{ほうききた}古墳群(亀岡市曾我部町犬飼)は犬飼川右岸の山地に分布する古墳群である。第2次調査では3地点で3基の古墳などを調査した。7トレンチ5号墳は無袖の横穴式石室を持つ直径8mの円墳である。墳丘および石室の解体を行ったところ、墳丘内に列石をめぐらせていることや、墳丘の上方斜面から湧水のある部分では礫を敷き詰める地業を行い、暗渠を設けて墳丘を築いていることが判明した。7世紀前半の古墳と考えられる。

10トレンチ20号墳は無袖の横穴式石室を持つ6世紀後半の円墳である。直径6mの墳丘および石室の解体を行ったところ、墳丘内に列石を備えていること、地山にコ字状の布掘りを行って石室基底部の石材を据えていることや、上方に隣接する7号墳から流出した墳丘盛土を切って20号墳の周溝が掘られていることなどが判明した。このほか、直径6mの円墳であることが判明した16トレンチ24号墳は、次年度に調査を継続する(当調査研究センター)。



亀岡市法貴古墳群調査風景

法貴古墳群（亀岡市曾我部町法貴）は法貴谷川と犬飼川の挟まれた山地に分布する古墳群である。56号墳は横穴式石室を持つ6世紀中ごろの円墳であることが判明した。長さ2.3m、幅1.9mの正方形に近い平面形の玄室を持つ。玄室床面には礫が敷かれている。墳丘は次年度に調査を行う予定である。また、56号墳の北東下方で新たに長さ2.0m、幅0.7mの玄室を持つ石室S X19を検出した。床面には礫が敷かれている。墳丘は削平されており、

規模は不明である（当調査研究センター）。

^{かすかべ}
春日部遺跡（亀岡市曾我部町中）は曾我谷川が形成した扇状地性低位段丘上に立地する遺跡である。これまでの調査で古墳時代中期から後期にかけての竪穴建物などの遺構が見つかった。第6次調査では竪穴建物や焼土坑などを検出した。中期の竪穴建物SH60は、1辺5.5mの方形で、中央に炉の焼土、西辺中央部に竈の焼土痕跡があり、東辺中央に貯蔵穴を持つ。貯蔵穴内や床面から大阪湾岸の製塩土器が出土した。このほかに6世紀後半の方形竪穴建物2基を検出している（当調査研究センター）。

（4）古代

北野台遺跡（綾部市位田町）は由良川右岸の低地に立地する。今回の調査では、1トレンチで東西2間、南北5間以上の掘立柱建物S B01を検出した。掘形は1辺60cm前後の正方形で、ほぼすべての柱穴に直径20cm余、残存長60～100cmを測る柱根が残っていた。心々距離は桁行方向で2.4m、梁行方向で3.1mを測る。この建物の北側隣接地では京都府教育委員会が第6次調査を行い、S B01の西側柱列の延長線上で3本、東側柱列の延長線上で1本の柱根が確認されていた。第6



綾部市北野台遺跡の大型掘立柱建物

次調査では柱掘形を確認できず、時期不明の杭として掘り飛ばされてしまったが、これらもSB01を構成する柱根であることは間違いなく、本来は南北8間以上の長大な建物であったと考えられる。出土遺物などから、奈良時代末頃の建物と考えられる。2トレンチでは弥生後期から平安時代の遺物を含む自然河川が見つかり、墨書土器7点、円面硯・転用硯各1点を含む遺物が多数出土した。



亀岡市法貴古墳群で見つかった火葬墓

長大な掘立柱建物や、墨書土器などの出土で示される識字層の存在から考えて、調査地は官衙施設の一画に当たっている可能性が高い(当調査研究センター)。

法貴古墳群(亀岡市曾我部町法貴)の調査では、51号墳の西側で2基の火葬墓が見つかった。火葬墓SX08は長さ1.8m、幅1.2mの土坑に木櫃をふたつ納めていた。そのうちひとつからは須恵器平瓶・杯蓋・破碎された人骨が出土した(当調査研究センター)。

春日部遺跡では、これまでの調査で平安時代後期の方形居館などの遺構が見つかった。第6次調査でも平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物などを検出した。掘立柱建物SB45は桁行3間、梁間2間の東西棟で、柱穴内から緑釉陶器が出土した。9世紀末の建物と考えられる。SB20は3間四方の総柱建物で、平安時代の建物と考えられる(当調査研究センター)。

平安宮跡・二条城北遺跡(京都市上京区主税町)では、平安宮^{しょういん}舎院の南端部で宮内省との境界の宮内道路沿に沿って並ぶ土器の廃棄土坑が確認された。廃棄土坑内からは、愛知県猿投窯跡で生産された平安時代前期の緑釉四足壺が出土した(京都市埋蔵文化財研究所)。

平安京跡左京四条一坊三町(京都市中京区^{みふ}壬生御所ノ内町)では、平安時代中期の掘立柱建物跡などがみつき、周辺の調査成果から、南側に池のある宅地があり、その廃絶後に広範囲の整地を伴う宅地の分割が行われ、鎌倉時代以降は都城としては衰退し、耕作地として利用されたことが判明した(京都市埋蔵文化財研究所)。

平安京右京六条三坊四町(京都市右京区西院溝崎町)では、東四行北三門・北四門の宇多小路東側の宅地で平安時代前期の内溝が見つかったが、9世紀中頃以降土地利用がなくなり、鎌倉時代に耕作地となる変遷が明らかになった(京都市埋蔵文化財研究所)。

乙訓寺(長岡京市今里)は、白鳳期の建立と伝わる寺院である。建立当時の伽藍配置や関連施設、長岡京造営とのかかわりについて調べるため、長岡京市が継続的に発掘調査を実施している。第30次調査では第1次調査で確認された講堂と推定される建物の身舎と庇の柱穴の正確な位置を確認するための再調査が、第32次調査では第29次調査で検出された大型掘立柱建物跡の規模を確認する調査が行われた(長岡京市埋蔵文化財センター)。



京丹後市佐屋利遺跡で検出された石組井戸と石組遺構

(5)中世

佐屋利遺跡(京丹後市峰山町荒山)は丹後半島最大の河川である竹野川右岸の丘陵先端付近に立地する。これまでの調査で、弥生時代・古墳時代の遺構が見つかったが、第3次調査では、中世前期の方形居館が見つかった。居館は南辺を丘陵裾に沿って東西に流れる自然流路とこれに直交する2本の南北溝によって区画される。2本の南北溝に挟まれた東西約50mが居館の東西幅で、北辺は調査区外に及ぶ。居館の中央部には、上方からの流水を受けるL字形の水切りの溝で画された掘立柱建物を構成するピット群が検出され、複数回の建て替えが行われたと思われる。ピットの中には短刀や^{さしげに}緒銭を埋納するものがある。居館の南東部では井戸が2基検出された。1基は木組みの方形井戸、もう1基は石組の円形井戸で

ある。方形井戸の上部は東西方向の居館南辺を限る自然流路に切られている。この自然流路は竹野川に流れ込む支流から洪水時の溢流が丘陵縁辺に沿って流れ出るものであり、井戸が削られているのは、もう少し南に広がっていた丘陵が溢流によって側方を削られたためと考えられる。

調査地は中郡盆地を見渡せる丘陵端部で、居館の立地にふさわしい。丹後地域ではこれまで明確な中世居館遺跡は知られておらず、重要な発見となった(当調査研究センター)。

堀城跡(京丹後市大宮町^{こうべ}河辺)は、北に向かって伸びる尾根の先端に築かれた小規模な山城で、尾根の先を東西に横切る大宮町^{のぶとし}延利方面に通じる道を監視する機能を持っていたと思われる。調査区南端で城の南を限る堀切と土塁を確認した。土塁の北側に広がる曲輪面では東の急峻な切岸沿いに小ピットが並び、柵が建てられていたと考えられるが、曲輪面は傾斜が大きく、建物などは確認されなかった。北西側と南西側斜面では帯曲輪を検出した。南西側の帯曲輪は南の堀切の下端に接続している(当調査研究センター)。

井手遺跡(亀岡市本梅町井手)は園部川の支流本梅川の左岸扇状地上に立地する遺跡である。第7次調査では、中世前期の掘立柱建物跡などが検出され、同時期に自然流路を埋め立てて土地の改変を行っていることが確認された(当調査研究センター)。

犬飼遺跡(亀岡市曾我部町法貴)は、法貴谷川左岸扇状地上に立地する遺跡で、平成30年度・令和元年度の調査では鎌倉時代後半の方形居館跡が見つかった。第12次調査では南北2間、東西3間の総柱建物を2棟検出した。瓦器碗や白磁などが多数出土しており、扇状地上に中世前期

の集落が展開していたと考えられる(当調査研究センター)。

春日部遺跡ではSB400は桁行3間、梁間2間の総柱建物がみつまっている。柱穴内から瓦器片が出土し、鎌倉時代の建物と考えられる(当調査研究センター)。

大藪遺跡・下久世^{かまへ}構跡(京都市南区)では、鎌倉時代から室町時代の下久世構の西辺を画す可能性のある区画溝とその東側に展開する掘立柱建物・柵などが確認された(京都市埋蔵文化財研究所)。

(6)近世

女布遺跡^{によう}(舞鶴市女布)は西舞鶴地区を貫流する伊佐津川左岸平野から南西部に派生する谷平野に立地している。これまでの調査で弥生時代から奈良・飛鳥時代と平安時代から中世の遺構・遺物が確認されている。今回の調査では、調査対象地中心部に位置する3地区1トレンチで北西方向に推定される低湿地の縁辺部から木簡が20点余り出土した。木簡の時期は特定できないが、近世の可能性が高い。判読可能なものを見ると「百石三升」など稲の品種や量を記したものが多く、また「勘左衛門」という人名が記されたものが複数あり、まとまりのあるものが捨てられたと推定できる(当調査研究センター)。

山家陣屋跡^{やまが}(綾部市山家)では、綾部市教育委員会による内容確認調査が続いていたが、北西部の石垣の測量を行うためにきれいに掃除され、往時の姿が現われた。

史跡仁和寺御所跡(京都市右京区御室)では、江戸時代の仁和寺中門と中門から続く土塀の基礎、および、その北側に続く整地層が確認された。中門北側の整地層は、7層に分けて厚さ1.1m以上にわたって固く締めながら水平に積み上げられ、その工程の途中で形成された締まった面に敷石が敷かれる。敷石の上には土塀南面に構築された石垣の栗石、土塀の根石、地覆石が載る。中門の基壇付近には別の敷石が確認され、寛永18(1641)年～正保4(1647)年の間に建てられた中門の基礎とみられる(京都市埋蔵文化財研究所)。



往時の姿を現した山家陣屋跡の高石垣

平安京跡・公家町遺跡・京都新城跡(京都市上京区京都御苑^{きょうごえん})では、大宮仙洞御所内の調査で、京都新城・仙洞御所・大嘗宮に関連する遺構が見つかった。京都新城の堀は2019年度の調査で確認された西肩の石垣から東に10.0mの地点の断ち割り堀埋土が確認され、東に15.5mの地点では堀の外と判断されるため、この間に東肩の石垣が存在するものと考えられる(京都市埋蔵文化財研究所)。その後、この調査地のすぐ南側で行われた試掘調査で東肩の石垣が確認され、この部分での堀幅は10.8mと判明した(京都市文化財保護課)。

平安宮跡・二条城北遺跡では、江戸時代中期の京都所司代御用屋敷の周辺に展開する武家屋敷街区の交差点で道路側溝とみられる溝が確認された(京都市埋蔵文化財研究所)。

淀水垂^{みづたれ}大下津町遺跡(京都市伏見区淀水垂町)では、江戸時代から明治時代までの水制や護岸が確認され、桂川の治水工事の具体像が明らかになった(京都市埋蔵文化財研究所)。

淀城跡(京都市伏見区淀池上町)では、東曲輪で江戸時代後期の家老屋敷跡の礎石建物群と、鳥羽・伏見の戦いに伴う火災痕跡が検出された。屋敷地全体が18世紀後半に嵩上げされており、嵩上げ後に再建された礎石建物には、江戸を中心とした関東地方に分布する「ろうそく基礎」という軟弱基盤に対応した工法が採用されていたことが明らかになった(京都市埋蔵文化財研究所)。

3. おわりに

本稿で紹介した調査成果のうち、もっとも注目されるのは、綾部市北野台遺跡である。長大な掘立柱建物と硯や墨書土器が確認され、これまで知られていなかった古代官衙の存在する可能性が考えられる。今後の周辺での調査に際しては注意が必要であろう。

京丹後市峰山町佐屋利遺跡の中郡盆地を見渡す丘陵縁辺部に設けられた遺構群は、丹後地域で初めて発見された中世居館として注目される。周辺は荘園関係の史料が乏しく、史料に現れない荘園の在り方の一端を示す資料になりうるもので、今後の整理報告に期待したい。

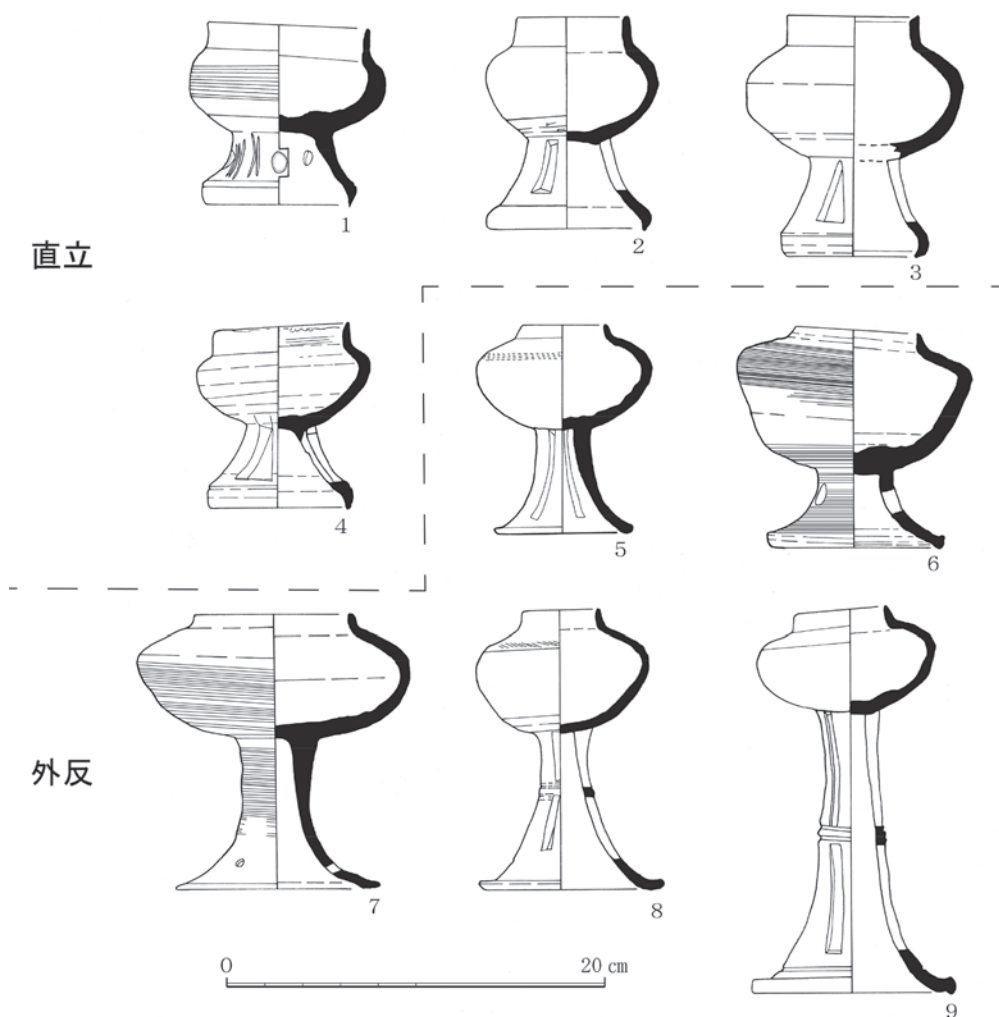
新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から、大半の調査で現地公開ができなかったが、その他の調査成果もそれぞれの地域史を紐解く貴重な資料であり、今年度は状況を見極めながら、できるだけ調査成果の公開に努めたい。(もりしま・やすお＝当調査研究センター調査第1係長)

畿内横穴式石室導入期における須恵器高杯の 器形変化とその背景(下)

野 島 悠 之

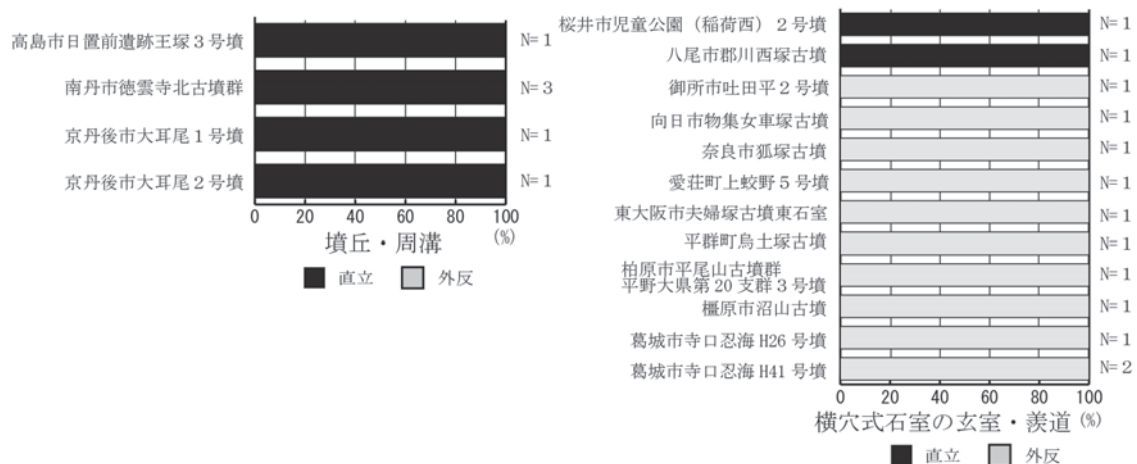
6. 須恵器脚付短頸壺について

須恵器高杯にみられた脚部形態の変化が他の器種でも起こっているかを判断するため、類例は限られるものの須恵器の脚付短頸壺についても見てみよう(第12・13図)。まずは、木棺直葬墓やそれに類すると推定される遺構出土資料を検討する。滋賀県高島市日置前遺跡王塚3号墳、南丹



- 1 : 滋賀県高島市日置前遺跡王塚3号墳(周溝) 2 : 京都府南丹市徳雲寺北古墳群(B地点土器集積)
 3 : 京都府京丹後市大耳尾1号墳(表土) 4 : 奈良県桜井市児童公園(稲荷西)2号墳(石室東側壁)
 5 : 奈良県御所市吐田平2号墳(玄室袖部) 6 : 滋賀県愛荘町上蛟野5号墳(石室床面)
 7 : 京都府向日市物集女車塚古墳(玄室右側壁) 8 : 奈良県葛城市寺口忍海H26号墳(玄室左側壁)
 9 : 奈良県平群町烏土塚古墳(玄室奥壁部)

第12図 須恵器脚付短頸壺の諸例



第13図 脚付短頸壺の脚部形態の比率

市徳雲寺北古墳群（いずれもTK23・47型式期）、京丹後市大耳尾1号墳（MT15型式期）、同2号墳（TK10型式期）出土の脚付短頸壺では、いずれも脚部形態が直立である。

次に、横穴式石室の玄室・羨道出土の資料を扱う。TK23・47型式期～MT15型式期に相当する資料としては、奈良県桜井市児童公園（稲荷西）2号墳、大阪府八尾市郡川西塚古墳があげられる。これらの脚部形態は直立を呈する。続く奈良県御所市吐田平2号墳（TK10型式期）では外反形態の個体が出現し、葛城市寺口忍海H41号墳（TK217型式期）まで外反状の脚部形態を持つ個体が継続的に出土する。よって、脚付短頸壺は須恵器高杯と似たような脚部形態の変遷をたどることができる。

以上のことから、出土位置と脚部形態の対応関係は有蓋高杯・無蓋高杯・脚付短頸壺といずれの器種にも認められ、器種横断的な傾向であることがわかる。ただし、今回提示した脚付短頸壺については高杯に比して絶対的な資料数が少ないことから、今後の状況によっては、変遷の過程が再考できる余地が残る。あくまで現状の資料状況における知見である点を留意されたい。

前章での検討により、直立形態は生産地においては製品同士の融着を防ぐ役割を果たしたと想定できる。あえて窯道具を用いるのではなく、須恵器自体に融着防止の機能を付したのは、生産地の都合に加え、脚部を地面にうずめて固定する、消費地での使用法も加味していたためと考えられている。

外反の脚部形態が出現した背景には、消費地、特に古墳で用いる器種として高まった需要があると想定される。具体的には、古墳において須恵器を用いる位置が墳丘・造出から横穴式の石室内へと移動し、礫敷の床面に置く、または須恵器が大型化し、重量が増した杯部を支えるために、より安定性のある脚部を志向したのだろう。

もちろん、生産地での創意工夫、生産効率化によって外反の脚部形態が出現した可能性も残されるものの、重ね焼きをするには不向きな器形であることは明らかであり、筆者は古墳における須恵器の扱いが変化したためと考えている。

7. 歴史的背景について

(1) 畿内型横穴式石室出現以前の古墳文化との連続性

横穴式石室が普及して以降も、京都市芝1号墳^(注1)(TK10型式期)など直立の脚部形態が一部残存する。この背景については、墳丘から出土する土器と、横穴式石室から出土する土器の器種構成は類似する(寺前2012)と指摘されるように、畿内型横穴式石室の導入段階では墳丘や造出で用いる前提で作られた器形を、そのまま横穴式石室に移入したのだろう。副葬品についても、鏡・刀剣を棺内や棺の周囲に置くことは前期古墳以来一般的に認められる(森本2012)など、畿内型の横穴式石室が導入されてからも、倭在来の古墳文化との連続性も認めねばならない。直立の脚部形態を持つ高杯が、横穴式石室の玄室から出土する例があることも、この点を傍証している。

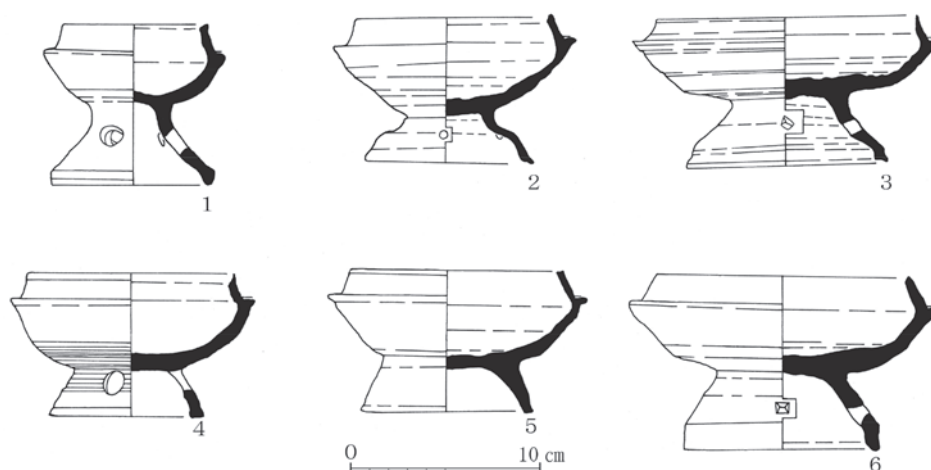
(2) 横穴式石室出土土器の革新性

TK23・47～TK10型式期の直立形態の高杯は大枠として「直立形態」として分類できるが、細部を確認すると、多様性を有している(第14図)。例えば、透かし穴に着目すると、円形(南丹市塩谷南古墳、京丹後市谷垣3号墳、城陽市芝山3号墳など)、長方形(高島市日置前遺跡王塚3号墳、城陽市赤塚古墳など)、方形(交野市倉治1号墳、京丹後市八幡山6号墳)、透かし無し(たつの市笹田古墳など)に分けられる。さらに、同じ円形の透かし穴を持つ塩谷南古墳、谷垣3号墳、芝山3号墳でも、脚部の形状や外面調整などは一致していない。つまり、産地や個体ごとの差異はあれど、地域に偏りなく直立形態といえる個体が出土している。

筆者はこのようなバリエーション豊かな脚付器種が、器種横断的に外反形態に置き換わることに、MT15型式期以降の革新性があると考えている。

しかし、中久保辰夫は導入期の畿内型横穴式石室にMT15型式期の須恵器が伴う事例が少ないこと、群集墳の盛行がTK10型式期に下ることから、当該期に器種構成や器形が変化する背景を再考すべきと主張している(中久保2016)。そして、栄山江流域における提瓶・短頸壺の増加や、倭と栄山江流域ともに杯蓋・杯身の大型化、甕の長頸化の現象が認められると指摘し、様式変化の背景を外的要因に求めると述べる(中久保2016・2019)。

まず、今回明らかにになったことを再度整理す



1：京都府南丹市塩谷南古墳 2：京都府京丹後市谷垣3号墳
3：大阪府交野市倉治1号墳 4：京都府城陽市芝山3号墳
5：兵庫県たつの市笹田古墳 6：京都府京丹後市八幡山6号墳

第14図 TK23・47～TK10型式期における有蓋高杯の多様性

ると、次の3点にまとめられる。①MT15～TK10型式期には、中久保が述べるような杯・甗の長大化や提瓶・短頸壺の出現・普及に加えて、脚付器種の形にも変化があった。当該期の須恵器の変化は器形の長大化・器種構成と、須恵器全体に及ぶ「器種横断性」を有していた。②外反形態の高杯や長大化した杯・甗、提瓶などの新しい土器様式は畿内型横穴式石室だけでなく、木棺直葬墓にも普及した。つまり、倭の在地的な埋葬施設においても、土器の形の変化をもたらす「拡散性」を有していた。③MT15型式期には、須恵器の形に加え生産地における重ね焼き方法も変化した可能性があり、古墳での須恵器出土位置の移動や器形の変化とも対応している。

このようにみると、6世紀前半における須恵器の器種構成・器形の変化は横穴式石室の導入や葬送儀礼の背後にある政治情勢とも密接にかかわり、窯業生産などにも影響関係が及んでいた可能性が高い。例えば、大阪府豊中市・吹田市にまたがる千里窯跡群からは、「千里系高杯」と呼称される高杯が出土している(田村2010)。この高杯は田村のいう千里Ⅱ期(6世紀前半)に数量が増加している。筆者の見解では外反形態の1パターンに含まれると解釈している^(注2)。この背景として、福永伸哉は千里窯跡群のうち、豊中市側の桜井谷窯跡群が6世紀前半に操業を大きく拡大しており、猪名川流域の首長墓系譜の変化と対応がとれることを重視している(福永2013)。福永の主張で注目すべきは、北摂地域の窯業生産にテコ入れを行ったのは、継体大王を中心とした当該期のエリート層であったと推定される点である。

つまり、千里窯跡群で特徴的な形状が創出されるのは、政権中心で桜井谷窯跡群が再編・拡大される時期に相当しており、新たな高杯の創出には政権の意向が少なからず想定できよう。

千里窯産以外の他の外反形態の高杯については、陶邑や地方窯で創出されたと考えるのが妥当であろう。注意すべきは、新器形を考案するに際して、新たに伝来した埋葬主体部と、それに伴う葬送儀礼が念頭にあったと考えられることだ。

今後、MT15型式期の古墳の土器資料が充実すれば、中久保が提示した問題解決につながることを期待したい。

(3) 須恵器の変化に対する政治的背景

畿内型横穴式石室の出現以前では、器台と壺、甗といった大型須恵器と土師器・須恵器の高杯群が組み合わせて墳丘で用いられるケースが、南九州から関東まで広い地域に認められる(寺前2018 p.39)。墳丘での儀礼で用いられる土器は、有蓋高杯を例にとってもバリエーション豊かに存在していた。また、当該期には埋葬施設にも多様性が認められ、5世紀中～後葉の群集墳の埋葬主体部には木棺直葬墓、竪穴式石室、箱式石棺墓など多様性があり、被葬者の出自・来歴が表出していると想定されている(川西2004)。このように、墳丘での共飲共食という緩やかな枠組みの中にも、土器の作りや埋葬施設などに個別的な在り方が認められる。

この背景として、倭の政権の力が強まることで政治的安定がもたらされた結果、古墳における葬送儀礼の意義低下があったと考える。権力強化の具体例としては、対外交渉経路の一本化が挙げられる。高田貫太は、Ⅱ期(TK 208～TK 47型式期)後半以降、倭王権は諸地域社会の主体的な対半島交渉を抑制し、一元的な対外交渉権の獲得に乗り出したと指摘する(高田2014)。

また、木村理は古墳時代中期後葉～末(TK208～TK 23・47型式期)に、王権中枢から埴輪製作技術等を供与する度合いが下がるほど、埴輪祭祀のもつ意義が下がり、特定有力者が政治・経済的な優位性を確立したことで、墳墓や葬送儀礼を通じた階層表示の重要性が低くなった可能性を指摘した(木村2020)。

つまり、畿内政権の力が強まり、倭の内部で政治的安定がもたらされたことで、葬送儀礼により有力首長間の関係性を示す必要性が減じ、葬送儀礼は簡略化の道を歩んだ。その結果、葬送儀礼には墳丘での共飲共食という大枠での共通性の中に須恵器の形状、埋葬施設の多様性などの個別性が現出したのだろう。

しかし、MT15型式期以降、倭の内外ともに社会情勢は大きく変化した。対外的には韓半島では、高句麗に対する百済－新羅－大加耶の連携が崩れ、新羅の加耶進出とそれによる百済・新羅間の対立がおこるなど、非常に流動的な政治情勢になる(高田2014)。倭の内部では、MT15～TK10型式期に北河内・摂津・紀伊地域で衰退・廃絶する集落が確認される(小池2022)など、集落の在り方に大きな変化がみられる。

筆者は、畿内政権が当該期において「地域首長に委ねていた地域支配を直接支配に転じた」(小池2022)とする小池の主張に対しては別の見解を有しているが、MT15～TK10型式期は倭の内部において大きな社会的変容が訪れた時期であったという点では同意している。

新たな墓制としては、畿内型横穴式石室が導入され、土器の器形、出土位置が変化した。それに加えて、柏原市高井田山古墳や京都市芝1号墳などで顕著のように、当初は墳丘で用いる器形や、その影響を受けたものを用いていたが、しだいに横穴式石室に納める前提の器形が出現する。それは、新来の横穴式石室と、倭在来の須恵器の器形、それに伴う土器使用法が融合し、体系化された段階であるといえるだろう。

予察ではあるが、当該期には北陸・遠江・尾張・三河などで新たな須恵器生産地の成立が指摘されており(岩越2018)、本論で検討してきた器形や重ね焼き法の変化とも相関する可能性がある。古墳での需要が変容したため、それに応じて生産地も再編された可能性を指摘しておきたい。つまり、大きな社会的変化の背後には、前代の古墳文化を継承しつつ、それを再編する継体大王の姿がうかがえるのだ。(のじま・はるゆき＝兵庫県立考古博物館学習支援課技術職員)

謝辞 資料調査や実測図・写真の掲載に際しては、下記の方々、諸機関にお世話になりました。記して深く感謝申し上げます。また、城陽市教育委員会におかれましては、赤塚古墳の調査時の写真を実見させていただき、本稿掲載に関してご高配を賜りました。末筆ながら、感謝いたします。

浅井猛宏、小泉裕司、白井忠雄、宮崎雅充、城陽市教育委員会、高島市教育委員会(敬称略・順不同)

注1 京都市芝1号墳の有蓋高杯は、前稿(野島2021)では外反形態の個体として扱ったが、本論では直立形態として、解釈を改めている。その根拠は、高杯脚部の端面が下を向いており、ハの字状に裾広がりにならないことである。また、報告書の巻頭カラー写真を参照すると、自然釉がかからない円形の痕

跡が認められる高杯蓋が1個体ある。これは、本文中でも指摘したように、別個体の脚部が重ねられていたため、その範囲のみ降灰痕跡が認められないと考えられる。すなわち柱状の重ね焼きがなされたと想定でき、筆者は直立形態に相当すると理解している。

注2 筆者は田村（2010）の脚部形態 A・C～E は本稿での外反形態、B は直立形態に相当すると解釈している。

前稿（上）補足説明

第7図では、大津市穴太飼入13号墳が「穴太飼入13号墳－A」、「穴太飼入13号墳－B」として2度記載されている。それぞれの報告書では「穴太飼入13号墳」として報告されているが、埋葬主体部の図面や出土遺物を参照すると、別々の古墳と判断できる。本論では両者を区別するため、便宜的にA、Bとして扱った。

挿図出典

第1図 1 筆者作図、2～4 各報告書をトレース

第2図 各報告書を再トレース

第3図 筆者撮影

第4図 福永・北條編1991より転載

第5図 各報告書を再トレース

第6図 1 筆者作図、2～12 各報告書をトレース

第8図 各報告書を再トレース

第11図 城陽市教育委員会から提供

第12図 1 筆者作図、2～9 各報告書をトレース

第14図 各報告書をトレース

参考文献

岩越陽平 2018「6世紀初頭における地方窯の分布とその背景に関する考察」『待兼山考古学論集Ⅲ－大阪大学考古学研究室30周年記念論集－』大阪大学考古学研究室

川西宏幸 2004『同型鏡とワカタケル－古墳時代国家論の再構築－』同成社

木村 理 2020「古墳時代中期における政権中枢古墳群の埴輪生産」『考古学研究』第67巻第1号 考古学研究会

小池 寛 2022「古墳時代後期における集落廃絶の背景について」『京都府埋蔵文化財情報』第143号（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

高田貫太 2014『古墳時代の日朝関係－新羅・百済・大加耶と倭の交流史－』吉川弘文館

田村美沙 2010「千里窯における古墳時代後期の須恵器生産とその供給」『待兼山考古学論集』Ⅱ 大阪大学考古学研究室

寺前直人 2012「横穴式石室導入前後の古墳における土器組成」『駒澤史学』第77号 駒澤史学会

寺前直人 2018「須恵器の儀礼－土師器との比較をとおして－」『季刊考古学』第142号 雄山閣

中久保辰夫 2016「古墳時代後半期における土器研究の現状」『土器編年研究の現在と各時代の特質－須恵器生産の成立から終焉まで－』考古学研究会関西例会200回記念シンポジウム発表要旨集 考古学研究会 関西例会

中久保辰夫 2019「百済・栄山江流域と倭の相互交流とその歴史的役割」『国立歴史民俗博物館研究報告』第217集 国立歴史民俗博物館

野島悠之 2021「横穴式石室導入前後の須恵器高杯に関する一考察」『京都府埋蔵文化財情報』第141号（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

福永伸哉 2013「桜塚古墳群から桜井谷窯跡群へー古墳時代豊中の激動を読むー」『つどい』第310号 豊中歴史同好会

森本 徹 2012「儀礼から見た横穴式石室の特質」『ヒストリア』第235号 大阪歴史学会

報告書等

京都府

綾部市高谷6号墳 中村孝行 1973『高谷古墳群発掘調査概要』（綾部市文化財調査報告書1）綾部市教育委員会

宇治市坊主山古墳群 堤 圭三郎 1965「坊主山古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会、豊島直博編 2020『坊主山古墳群出土品報告書』奈良大学文学部文学研究科

亀岡市医王谷3号墳 水谷寿克・引原茂治・山口文吾・田中暢一 1983「医王谷3号墳・医王谷焼窯跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第7冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

京田辺市堀切1号墳 島軒 満編 2006『堀切古墳群発掘調査報告書』Ⅱ（京田辺市埋蔵文化財調査報告書第36集）京田辺市教育委員会

京丹後市大耳尾古墳群 岡林峰夫編 2014『大耳尾古墳群発掘調査報告書』（京都府京丹後市文化財調査報告書第10集）京丹後市教育委員会

京丹後市谷垣3号墳 岸岡貴英 1999「谷垣3号墳」『埋蔵文化財発掘調査概報』（1999）京都府教育委員会

京丹後市畑大塚2号墳 山内陽詳編 1988『畑大塚古墳群（京都府久美浜町文化財調査報告第10集）久美浜町教育委員会

京丹後市八幡山6号墳 安田 章 1988『扇谷遺跡発掘調査報告書』（京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書第12集）峰山町教育委員会

京丹後市峰山桃谷古墳 樋口隆康 1961「第六 峰山桃谷古墳」『京都府文化財調査報告』第22冊 京都府

京都市岩倉幡枝2号墳 丸川義広編 1993『岩倉幡枝2号墳－木棺直葬墳の調査－』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第12冊）（財）京都市埋蔵文化財研究所

京都市芝1号墳 熊井亮介編 2018『芝古墳（芝1号墳）調査総括報告書～乙訓における後期首長墓の調査～』京都市文化市民局

城陽市赤塚古墳 近藤義行 1983「平川廃寺・赤塚古墳発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第12集 城陽市教育委員会

城陽市黒土1号墳 小泉裕司 2001「Ⅰ 黒土1号墳の調査」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第40集 城陽市教育委員会

城陽市芝山3号墳 小池 寛編 1987『京都府遺跡調査概報』第25冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

長岡京市井ノ内稻荷塚古墳 寺前直人・高橋照彦編 2005『井ノ内稻荷塚古墳の研究』（大阪大学文学研究科考古学研究報告第3冊）大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団

南丹市塩谷南古墳 黒坪一樹 2012「塩谷南古墳群」『京都府遺跡調査報告集』第152冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

- 南丹市徳雲寺北古墳群 辻 健二郎 1997「徳雲寺北古墳群」『園部町小山東町土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』（園部町文化財調査報告第13集）園部町教育委員会
- 福知山市池の奥3号墳・4号墳 大槻眞純 1985『池の奥古墳群』（福知山市文化財調査報告書第7集）福知山市教育委員会
- 向日市物集女車塚古墳 秋山浩三・山中 章編 1988『物集女車塚古墳』（向日市埋蔵文化財調査報告書第23集）向日市教育委員会
- 向日市山畑6号墳 中塚 良 2007「長岡宮跡第282次～朝堂院西方官衙、山畑古墳群、乙訓郡衙跡、鶏冠井興隆寺跡」『長岡宮「翔鸞楼」修理式遺跡』（向日市埋蔵文化財調査報告書第75集）（財）向日市埋蔵文化財センター
- 大阪府
- 和泉市和泉向代4号墳・下代5号墳 白石耕治・乾 哲也編 1992『和泉丘陵の古墳－槇尾川中流域周辺の新古墳群の調査－』（和泉丘陵内遺跡発掘調査報告書Ⅲ）和泉丘陵内遺跡調査会
- 和泉市マイ山古墳 白石耕治ほか編 2021『館蔵品目録Ⅰ 古墳出土品Ⅰ マイ山古墳』和泉市いずみの国歴史館
- 柏原市大県遺跡第6支群1号墳 石田成年 2001「大県遺跡」『柏原市遺跡群発掘調査概報』2000年度（柏原市文化財概報2000－Ⅲ）柏原市教育委員会
- 柏原市高井田山古墳 安村俊史・桑野一幸編 1996『高井田山古墳』（柏原市文化財概報1995－Ⅱ）柏原市教育委員会
- 柏原市平尾山古墳群平野大県第20支群3号墳 石田成年 1993『柏原市遺跡群発掘調査概報』1992年度（柏原市文化財概報1992－Ⅳ）柏原市教育委員会
- 交野市倉治1号墳 交野市古文化研究会編 1975『倉治古墳群発掘調査概要－交野市大字倉治小字東浦所在－』（交野市古文化同好会記録1）交野市古文化研究会
- 堺市光明池26号窯 山田隆一 1998「調査の成果」『陶呂窯跡群発掘調査概要－府営ため池等整備事業「光明池地区」に伴う光明池第26・42号窯他の調査－』大阪府教育委員会
- 堺市小阪遺跡 森屋美佐子・清水 篤 1992『小阪遺跡本報告書－近畿自動車道松原海南線・府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査－』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
- 堺市陶器千塚・陶器遺跡 高島 徹編 2005『陶器千塚・陶器遺跡発掘調査概要』大阪府教委委員会、西川寿勝 2006『陶器千塚・陶器遺跡発掘調査概要』Ⅱ 大阪府教委委員会
- 堺市日置荘遺跡 江浦 洋 1995「古墳時代の遺構・遺物」『日置荘遺跡－近畿自動車道松原ささみ線及び都市計画道路松原泉大津線建設に伴う調査報告書－』（財）大阪文化財センター
- 豊中市桜井谷2－23号窯 福永伸哉・北條芳隆編 1991『桜井谷窯跡群2－23号窯』豊中市教育委員会
- 富田林市中佐備須恵器窯跡 栗田 薫 1987『中佐備須恵器窯跡発掘調査概要』（富田林市埋蔵文化財調査報告15）富田林市教育委員会
- 東大阪市みかん山9号墳 奥 和之 1998『みかん山古墳群－府営枚岡公園駐車場建設に伴う発掘調査－』（大阪府埋蔵文化財調査報告1997－2）大阪府教育委員会
- 東大阪市夫婦塚古墳東石室 才原金弘 1989「夫婦塚古墳調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要－昭和63年度－』（東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要30）東大阪市教育委員会
- 東大阪市花草山30号墳 井上伸一 2003『宅地造成に伴う花草山古墳群第2次発掘調査報告書－29・30・31号墳－』（財）東大阪市文化財協会

- 八尾市大石古墳 坪田真一 1995『大石古墳』((財)八尾市文化財調査研究会報告 44)(財)八尾市文化財調査研究会
- 八尾市郡川西塚古墳 清原得巖 1976「高安の遺跡と私」『大阪文化誌』第2巻第2号 (財)大阪文化財センター
- 中村 浩 1991「大阪府八尾市郡川西塚古墳出土須恵器について－東京国立博物館保管資料の再検討－」『大谷女子大学紀要』第26号第1輯 大谷女子大学
- 滋賀県
- 愛荘町上蛟野5号墳 近藤 滋 1977「秦荘町上蛟野古墳群」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告』Ⅳ－Ⅱ 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 吉井源三郎 1978「5号墳」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告』Ⅴ 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 大津市穴太飼入3号墳 松澤 修 2004「穴太飼入古墳群」『緊急雇用創出特別対策事業に伴う出土文化財資料化収納業務報告書』Ⅰ 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課
- 大津市穴太飼入13号墳－A3 松澤 修 2004「穴太飼入古墳群」『緊急雇用創出特別対策事業に伴う出土文化財資料化収納業務報告書』Ⅰ 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課
- 大津市穴太飼入13号墳－B3 辻川哲朗 2006『穴太飼入古墳群』滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・(財)滋賀県文化財保護協会
- 大津市春日山G5号墳 横田洋三 2002『春日山古墳群』(春日山公園整備関連遺跡発掘調査報告書) 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 大津市坂本本町嶽古墳 丸山竜平 1982『大津市坂本本町嶽古墳調査概要』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 大津市太鼓塚3号墳・5号墳 松浦俊和編 1980『滋賀里・穴太地区遺跡群発掘調査報告書』Ⅰ(大津市文化財調査報告書12) 大津市教育委員会
- 大津市太鼓塚26号墳 田中久雄 1992『太鼓塚遺跡発掘調査報告書』(大津市埋蔵文化財調査報告書19) 大津市教育委員会
- 大津市大通寺C1号墳 大崎康文編 2005『滋賀県緊急雇用創出特別対策事業に伴う出土文化財資料化収納業務報告書Ⅱ－2』滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・(財)滋賀県文化財保護協会
- 大津市福王子17号墳 林 博通 1983『大伴遺跡発掘調査報告』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 高島市日置前遺跡王塚3号墳 葛原秀雄 1995『日置前遺跡発掘調査概要報告書－王塚地区の調査－』今津町教育委員会
- 高島市田中36号墳 宮崎雅充・白井忠雄編 2010『田中36号墳発掘調査報告書』(高島市文化財調査報告書第14集) 高島市教育委員会
- 高島市南畑2号墳 宮崎雅充編 2019『南畑古墳群・下平古墳群発掘調査報告書』(高島市文化財調査報告書第34集) 高島市教育委員会
- 野洲市小堤2号墳 花田勝広 1992「小堤遺跡」『平成3年度野洲町内遺跡発掘調査概要』(野洲町文化財資料集1992－3) 野洲町教育委員会
- 野洲市小山遺跡 角 健一 1995「小山遺跡」『平成6年度野洲町内遺跡発掘調査概要』(野洲町文化財資料集1995－1) 野洲町教育委員会

- 米原市黄牛塚古墳 田中勝弘ほか 1976『北陸自動車道関係遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 米原市人塚古墳 稲葉隆宣・堀 真人 2000『人塚遺跡』中山間地域総合整備関係遺跡発掘調査報告書 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・(財)滋賀県文化財協会
- 栗東市和田古墳群 佐伯英樹編 1998『滋賀県栗太郡栗東市和田古墳群』(栗東町文化財調査報告書第4冊) 栗東町教育委員会
- 奈良県
- 斑鳩町藤ノ木古墳 奈良県立橿原考古学研究所編 1990『藤ノ木古墳』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 宇陀市岩清水スゲ谷古墳・岩清水ヲジガ谷古墳 小山浩和編 2003『岩清水スゲ谷古墳』(奈良県文化財調査報告書第99集) 奈良県立橿原考古学研究所
- 宇陀市後出20号墳 西藤清秀・吉村和昭・佐々木好直編 2003『後出古墳群』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第61冊) 奈良県立橿原考古学研究所
- 宇陀市谷5号墳 伊藤雅文編 1987『下井足遺跡群』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第52冊) 奈良県教育委員会
- 宇陀市トノヤシキ6号墳 泉森 皎 1985「トノヤシキ遺跡」『榛原町栗谷遺跡群』(奈良県文化財調査報告書第58集) 奈良県立橿原考古学研究所
- 宇陀市見田・大沢1号墳 亀田 博編 1982『見田・大沢古墳群』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第44冊) 奈良県教育委員会
- 橿原市沼山古墳 伊藤勇輔 1985『沼山古墳・益田池堤』(奈良県文化財調査報告書第48集) 奈良県立橿原考古学研究所
- 葛城市寺口忍海古墳群 吉村幾温・千賀 久編 1988『寺口忍海古墳群』(新庄町文化財調査報告第1冊) 新庄町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
- 広陵町牧野古墳 河上邦彦編 1987『牧野古墳』(広陵町文化財調査報告第1冊) 広陵町教育委員会
- 五條市釜窪大谷東原古墳 吉村和昭編 2009『釜窪大谷東原古墳』(奈良県文化財調査報告書第135集) 奈良県立橿原考古学研究所
- 五條市南阿田大塚山古墳 泉森 皎編 1982「南阿田大塚山古墳発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1980年度 奈良県立橿原考古学研究所、泉森 皎編 2022『南阿田大塚山古墳』(奈良県文化財調査報告書第190集) 奈良県立橿原考古学研究所
- 御所市巨勢山321号墳 藤田和尊編 1987『巨勢山古墳群』Ⅱ(御所市文化財調査報告書第6集) 御所市教育委員会
- 御所市吐田平2号墳 網干善教 1961「御所市森脇吐田平古墳群」『奈良県文化財調査報告書(埋蔵文化財編)』第四集 奈良県教育委員会
- 桜井市児童公園2号墳(稲荷西2号墳) 網干善教 1959「桜井公園第二及び第三号古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第十一輯 奈良県教育委員会、福辻 淳 2007「稲荷西2号墳出土遺物について」『桜井公園遺跡群－双築古墳群と安倍山遺跡の発掘調査－』(桜井市内埋蔵文化財 2002年度発掘調査報告書4)(財)桜井市文化財協会
- 桜井市忍坂4号墳・竜谷5号墳 前園実知雄編 1978『桜井市外鎌山北嶺古墳群』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第34冊) 奈良県教育委員会
- 高取町イノラク16号墳 木場幸弘編 1992『イノラク古墳群第4次発掘調査報告』(高取町文化財調査報告第12冊) 高取町教育委員会

- 高取町市尾墓山古墳 河上邦彦編 1984『市尾墓山古墳』(高取町文化財調査報告第5冊) 高取町教育委員会
- 高取町藤井大谷2号墳 沓岐一哉 2004『藤井大谷古墳群』(高取町文化財調査報告第28冊) 高取町教育委員会
- 天理市赤坂9号墳 高野政昭編 2010『布留遺跡趾之内(赤坂・北池)地区発掘調査報告書』(考古学調査研究中間報告22) 埋蔵文化財天理教調査団
- 天理市五合瀬古墳 鈴木裕明 2007「乙木・佐保庄遺跡第2～3次」『マバカ古墳周辺の調査』(奈良県立橿原考古学研究所調査報告第99冊) 奈良県立橿原考古学研究所
- 奈良市狐塚古墳 伊達宗泰 1961「奈良市山町狐塚古墳」『奈良県文化財調査報告書(埋蔵文化財編)』第四集 奈良県教育委員会
- 平群町烏土塚古墳 伊達宗泰・岡 幸二郎編 1972『烏土塚古墳』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第27冊) 奈良県教育委員会
- 兵庫県
- 小野市南山4号墳 別府洋二 1993「南山古墳群」『浄谷遺跡・南山古墳群・玉津田中遺跡南大山地点—一般国道175号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—』(兵庫県文化財調査報告第121冊) 兵庫県教育委員会
- 加西市石黒山2号墳 立花 聡編 1991『石黒山2号墳 付愛宕山2号墳』(加西市埋蔵文化財報告5) 兵庫県加西市教育委員会
- 加東市黒石山11号墳 森下大輔編 1986『黒石山古墳群』加東郡教育委員会
- 川西市勝福寺古墳 岡野慶隆・寺前直人・福永伸哉編 2006『川西市勝福寺古墳発掘調査報告』川西市教育委員会
- 寺前直人・福永伸哉編 2007『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第4冊 大阪大学勝福寺古墳発掘調査団
- 神戸市狩口きつね塚古墳 山本雅和 1995「狩口きつね塚古墳」『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 三田市高川1号墳 岡崎正雄編 1991『高川古墳群』(兵庫県文化財調査報告書第97冊) 兵庫県教育委員会
- 三田市西山18号墳 中川 渉・菱田淳子 1999「西山古墳群」『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』V (兵庫県文化財調査報告第190冊) 兵庫県教育委員会
- たつの市笹田古墳 西口和彦・種定淳介編 1982『山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告I 笹田古墳』(兵庫県文化財調査報告書第15冊) 兵庫県教育委員会
- たつの市中垣内天神山古墳群 岸本道昭・古本 寛 1998『中垣内天神山・三昧山古墳群』(龍野市文化財調査報告19) 龍野市教育委員会
- たつの市龍子向イ山1号墳 村上賢治 1987「龍子向イ山1号墳」『龍子向イ山』(兵庫県文化財調査報告第51冊) 兵庫県教育委員会
- 丹波市多利向山B1号墳 山田清朝 1986「B-1号墳」『多利向山古墳群』(兵庫県文化財調査報告書第35冊) 兵庫県教育委員会
- 豊岡市岩井枯木1号墳 瀬戸谷 皓編 2000『岩井枯木遺跡群』(豊岡市文化財調査報告書第31集) 豊岡市教育委員会
- 姫路市太市中6号墳 柏原正民編 2003『太市中古墳群』(兵庫県文化財調査報告第258集) 兵庫県教育委員会

姫路市三方古墳 大平 茂・岸本道昭 1980「三方古墳調査報告」『播但有料自動車道建設にかかる埋蔵文化財調査埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ 兵庫県教育委員会

三木市窟屋1号墳 池田征弘編 2009『窟屋1号墳』（兵庫県文化財調査報告書第353冊）兵庫県教育委員会

三木市高木7号墳 遠竹陽一郎・柳下恵理子 2000『高木古墳群・高木多重土塁2』（三木市文化研究資料第16集）三木市教育委員会

養父市寺地古墳 久保弘幸・鐵 英記 2013『寺地古墳・寺地遺跡・寺地窯跡群』（兵庫県文化財調査報告第452冊）兵庫県教育委員会

和歌山県

和歌山市井辺八幡山古墳 森 浩一編 1972『井辺八幡山古墳』（同志社大学文学部考古学調査報告第5冊）同志社大学文学部文化学科内考古学研究室

仕切り板を備える須恵器

名村 威彦

1. 仕切り板を備える須恵器について

還元炎焼成を利用して製作される須恵器は、素焼きの土器と比較して堅緻で吸水性が低い。この特性のため、初期の須恵器生産において甕の生産数は多く、これは液体の貯蔵を目的としたためと考えられている。^(注1)

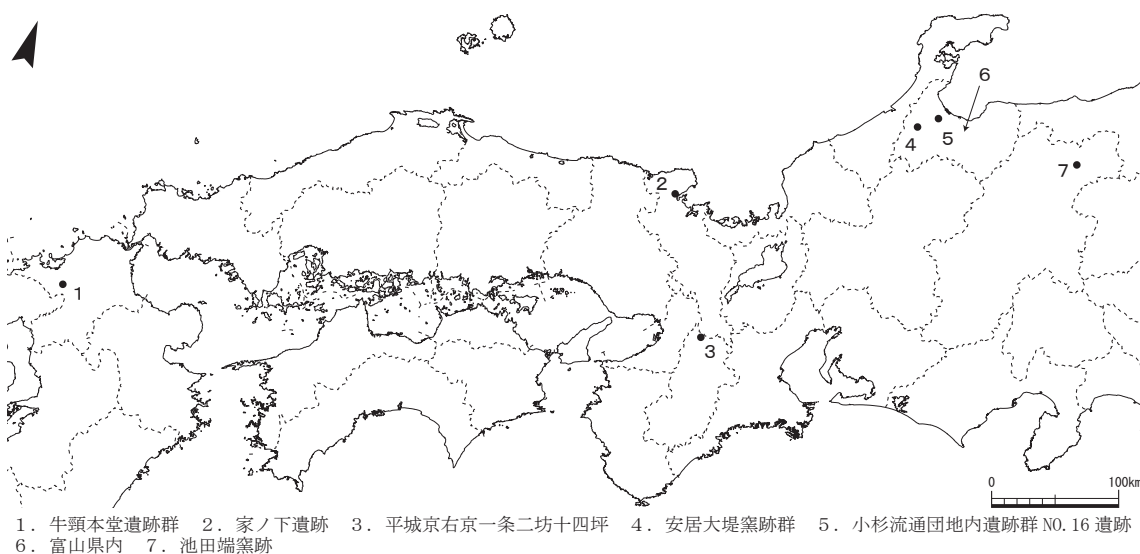
液体を貯蔵し、あるいは注いだと考えられる壺、瓶、甕の中に、内部に仕切り板をつくることで、貯蔵空間を複数備えたものがあり、浅見の限りでは7例を確認している。極めて少数ではあるが、仕切り板を備えており内部に複数の空間をもつ須恵器について出土事例を挙げ、製作方法や製作時期、製作地域を整理し、その性格や用途について推察してみたい。

2. 仕切り板を備える須恵器の諸例

現在のところ福岡県から長野県にいたる広い範囲で点在しており、やや日本海側での出土が目立つようである(第1図)。

(1) 牛頸本堂遺跡群^(注2)

福岡県大野城市上大利に所在する古墳時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡で、福岡平野を北流する御笠川の左岸の丘陵上に位置する。丘陵上部と谷部が調査されており、「村落寺院」の可能性が指摘される建物群や須恵器窯などが検出され、谷部包含層からは土器、斎串などが出土した。



第1図 仕切り板を備える須恵器の出土遺跡

付表1 仕切り板を備える須恵器の出土遺跡

	所在地	遺跡名	出土遺構	器 種	器 高 (cm)	器 幅 (cm)	時 期	文 献
1	福岡県	牛頸本堂遺跡群	谷埋土	横瓶	(26.8)	—	古墳時代末 (牛頸ⅣA)	注2
2	京都府	家ノ下遺跡	—	横瓶	16.9	18.6	—	注4
3	奈良県	平城京右京一条二坊 十四坪	井戸 SE09	壺B	20.8	25.7	奈良時代後半	注5
4	富山県	安居大堤窯跡群	2号窯跡灰原	環状瓶	25.2	22.9	奈良時代中頃	注6
5	富山県	小杉流通団地内遺跡群 NO.16 遺跡	1号窯跡灰層	横瓶	25.6	40.0	奈良時代前半 (平城Ⅱ)	注8
6	富山県	—	—	平瓶	—	—	—	注9
7	長野県	池田端窯跡	粘土採掘土坑 SK88	横瓶	(19.6)	[34.0]	奈良時代前半 (8世紀前半)	注9

現存値：() 復元値：[]

仕切り板を備える横瓶(第2図1)が第1次調査谷部包含層から出土した。体部外面にカキメが施されており、中央には仕切り板が別作りで貼りつけられている。接合痕から、平底の底部のあるドーム型のものに残る半身を貼りつけたと考えられている。出土した包含層からは古墳時代末(牛頸ⅣA期)^(注3)の須恵器が多数出土しており、この時期のものと考えられる。

(2)家ノ下遺跡^(注4)

京都府与謝郡与謝野町男山小字家ノ下付近で、男山川の改修工事の際に、仕切り板を備える横瓶が出土した(第2図2)。胴部中央は強いナデにより凹んでおり、やや瓢形を呈している。これは、仕切り板を底部としてドーム状の胴部を作り、もう半分のドーム状の胴部を接合した際に強くナデた痕跡と考えられる。中央につけられた仕切り板は内部で湾曲しており、乾燥状態になる前にドーム状の胴部を接合した際、底部となった側に自重で曲がったと思われる。

(3)平城京右京一条二坊十四坪^(注5)

奈良県奈良市西大寺栄町240-1に所在する。調査地の北側には西隆寺跡が位置する。古墳時代中期の河道と土坑、奈良時代の道路、溝、掘立柱建物、掘立柱塀、井戸などが検出された。

仕切り板を備える壺Bが井戸SE09から出土した(第2図3)。高台をもつ底部と卵形の体部に直立する口縁部からなり、肩部には一対の把手がつく。仕切板は一部が残存しており、厚さ5mm程の粘土板が貼りつけられている。奈良時代後半の須恵器と共伴する。

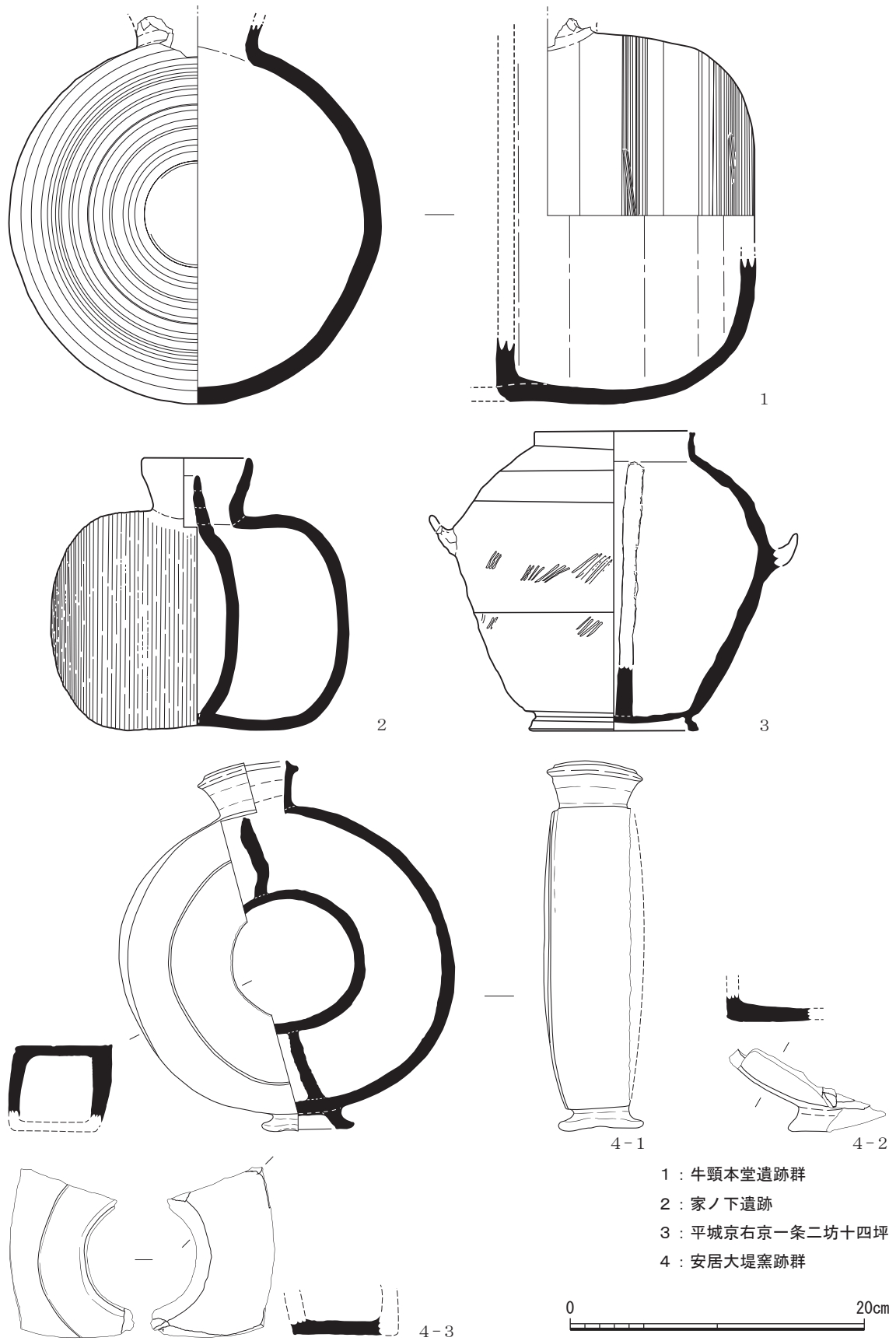
(4)安居大堤窯跡群^(注6)

富山県南砺市福野に所在する安居窯跡群の支群の一つである。報告書が未刊行のため詳細は不明であるが2号窯跡は8世紀代の地下掘り抜き式窖窯^(注7)である。

2号窯跡から仕切り板を備える縦型環状瓶が、少なくとも2個体出土した(第2図4)。仕切り板は厚さ8mm程度の粘土板が貼りつけられている。奈良時代中頃と考えられる。

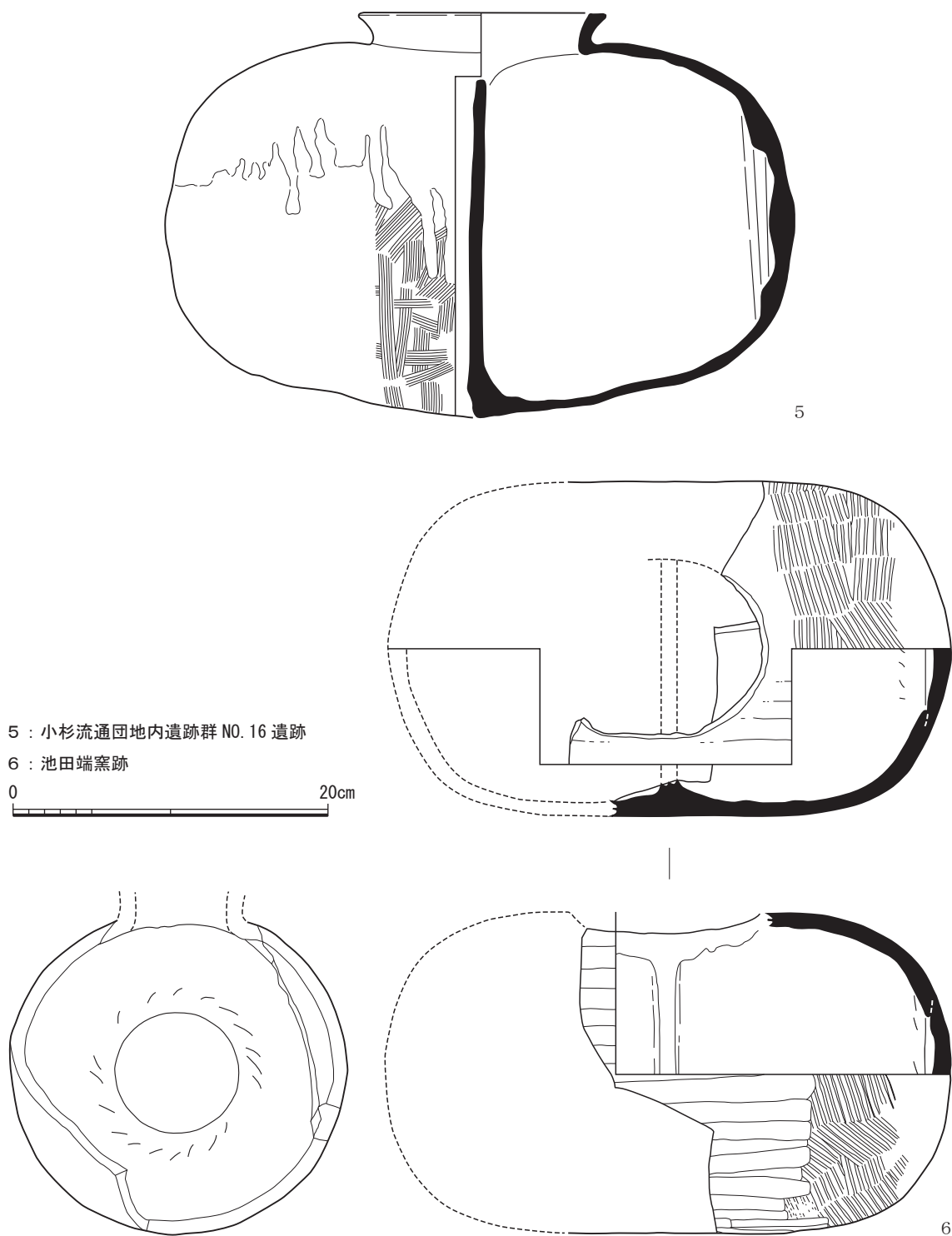
(5)小杉流通団地内遺跡群NO.16遺跡^(注8)

富山県射水市水戸田に所在する。奈良時代の須恵器窯および住居跡が検出された。土馬、印仏、台座や鳥形土器、陶製印章、硯、「小椅寺」墨書土器など寺院に関連する遺物が多く出土した。周辺には越中国分寺にほど近い、御亭角^{おちんかど}廢寺に瓦を供給した小杉丸山遺跡が位置する。



第2図 仕切り板を備える須恵器 1 S=1/4

半地下天井架構式あるいは地下掘り抜き式窖窯である1号窯跡の灰層から仕切り板を備える横瓶が出土した(第3図5)。実見できていないが、仕切り板を底部としてドーム状の胴部を作り、もう半分のドーム状の胴部を接合しようとしたものとみえ、胴部がほぼ半分欠損した状態で出土している。仕切り板は厚さ8mm程度である。窯の作業期間は平城Ⅱ段階であり、奈良時代前半と考えられる。



第3図 仕切り板を備える須恵器2 S=1/4

(6) 富山県例^(注9)

詳細については不明であるが、富山県内で仕切り板を備える横瓶が出土したとされる。

(7) 池田端窯跡^(注10)

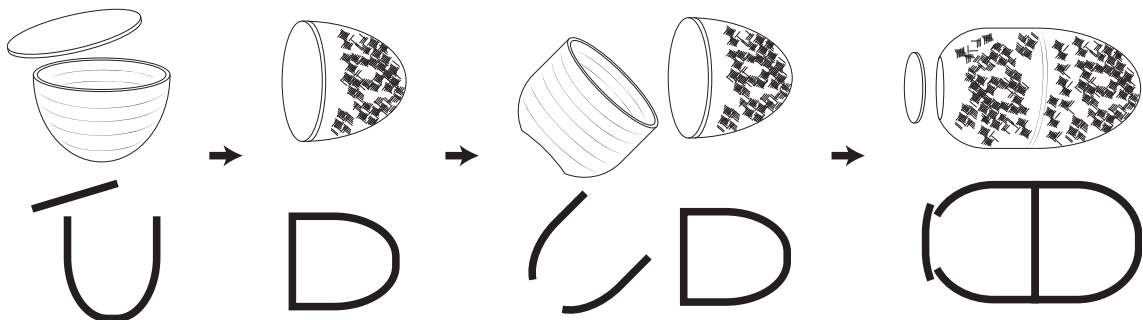
長野県上高井郡小布施町に所在する。奈良・平安時代の須恵器窯、瓦窯および粘土採掘坑などが検出された。2号窯は半地下式天井架構式窖窯で須恵器窯から瓦窯へと転用されている。出土した瓦は国分寺・国分尼寺では確認されておらず、官窯ではないとされる。粘土採掘坑S K88から仕切り板を備える横瓶が出土した(第3図6)。仕切り板部分は残存していないが、内部に仕切り板を貼り付けた痕跡が残っており、8～10mm程度の仕切り板とみられる。奈良時代前半の土器が共伴する。

以上、内部に仕切り板を備える須恵器の諸例を確認した。まとめると、内部に仕切り板を備える須恵器は、横瓶、壺、環状瓶があり、現状、横瓶の内部に仕切り板を備えるものが最も多い(付表)。また、牛頸本堂遺跡群、家ノ下遺跡、小杉流通団地内遺跡群No.16遺跡の例は製作方法に共通性があり、横瓶を製作する過程で胴部を半分作り、蓋をするように仕切り板をかぶせた後に残り半分の胴部を作る(第4図)。横瓶の場合、胴部を完全に成形してから仕切り板を取りつけることは極めて困難なため池田端窯跡の例も同様に製作されたものと考えられる。

製作時期については、不時発見の家ノ下遺跡例を除くと、牛頸本堂遺跡の横瓶が古墳時代末(6世紀末)頃である他は、すべて奈良時代(8世紀代)に製作されたものである。少数のため確実性は乏しいが、現状では奈良時代を中心に仕切り板を備える須恵器が各地で製作されている。

3. 仕切り板を備える須恵器の用途

仕切り板を備える須恵器の出土遺構は、窯跡が2例、土坑が1例、井戸が1例、谷埋土が1例である。安居大堤窯跡や小杉流通団地内遺跡群NO.16遺跡では窯跡灰原からの出土で、焼成に失敗した須恵器を廃棄したものであろう。池田端窯跡では粘土採掘土坑から出土している。報告によると大型の破片が複数出土しており、接合しても完形に復元できる例が少ないことから、破片の状態で遺跡内に持ち込まれた可能性がある^(注11)とされる。牛頸本堂遺跡では谷埋土から出土しており、台地上で使用されたものが廃棄後に流入したものと言えよう。平城京右京一条二坊十四坪では井戸の内部から製塩土器等とともに出土している。詳細な出土状況は不明であるため、廃棄されたものか、祭祀的な使用があったのかは判断できない。



第4図 仕切り板を備える横瓶の製作方法

使用用途を検討する上では、消費地での出土状況が重要な手がかりとなるが、残念ながら、いずれの出土例も廃棄や流入と考えられ、使用状況は判然としない。そこで、出土遺跡全体の性格や周辺の遺跡などの情報から仕切り板を備える須恵器の使用場所や用途を類推するほかない。

安居大堤窯跡については仕切り板を備える環状瓶が出土しているが報告書は刊行されておらず、窯跡全体の様相については不明である。環状瓶自体が一般的な器形ではなく、官衙や寺院での祭祀に使われたことが想定されている^(注12)。次に小杉流通団地内遺跡群No.16遺跡では仕切り板を備える須恵器とともに土馬、鳥形須恵器、印仏、蓮華座の台座、「小椅寺」墨書土器が出土しており、生産された須恵器が寺院に搬入された可能性が指摘できる。粘土採掘土坑から出土した、池田端窯跡の仕切り板を備える横瓶は、破片の状態で遺跡内に持ち込まれている可能性があり、須恵器生産あるいは瓦生産に関わる作業に用いられ、廃棄されたと考えられる。次に、平城京右京一条二坊十四坪では井戸内部から出土している。井戸内部から出土する土器については、井戸に対する信仰による意識的な埋蔵土器、湧水濾過のために充足された土器片、井戸使用時の落下、井戸廃絶時の投棄などの可能性を挙げうる^(注13)。祭祀として井戸内に埋納される土器の特徴として、壺や甕、瓶など水の容器にかかわる器種が多いこと、口縁部などの一部を意図的に打ち欠いた状態で出土すること、正立あるいは倒立状態で埋納されることなどが挙げられる^(注14)。平城京右京一条二坊十四坪では、出土状況の詳細は不明であるが、仕切り板を備える壺Bの口縁部の一部と仕切り板が欠損した状態で出土しており、祭祀として井戸内に埋納された可能性が考えられる。牛頸本堂遺跡では谷の埋土から出土しており、同一層の出土遺物から古墳時代末ごろと考えられ、他の出土例とはやや時期が異なる。遺跡内では当該期の須恵器窯や工房跡とされる竪穴建物も検出されているが、谷部に流れ込んだ遺物については焼け歪みなども少なく、灰原の遺物が流入したとは考えにくいと報告されており、使用状況については不明である。以上、出土遺構と出土状況、遺跡の性格を概観したところ、漠然とした傾向として「寺院に搬入された場合」、「祭祀に用いられた場合」、「須恵器や瓦の製作過程で使用された場合」が想定できる^(注16)。

ここまで、仕切り板を備える須恵器を集め検討を加えてきた。しかし当然ながら、「仕切り板を備える」という形態的な共通性が、使用用途や目的の共通性を示すとは限らない。時期や地域が異なるならばなおさらである。しかし、あえてその具体的な使用方法まで想像を広げてみたい。

「仕切り板を備える」という最大の特徴がもつ機能の一つとして、分割された空間に異なる物質を収めることが可能となることが挙げられる。しかし、固体であろうと液体であろうと、容器内に収める時点では分離しておくことが可能であっても、分離した状態のまま外に出すことが極めて難しい構造であるという点に注意しなければならない。つまり、実用する場合は、外に出す際に内容物が混合することを前提とした使用方法になるといえる。先に、仕切り板を備える須恵器の使用状況を検討したなかでは「須恵器や瓦の製作過程で使用された場合」が最も実践的な使用環境となる。製陶・製瓦の工程で使用された場合、例えば粘土と混和材を仕切り板で分離した状態で保管して使用時に混合する、あるいは種類の異なる陶土を保管して使用時に混合するといった用法も想定しうるが、筆者は製陶・製瓦の工程について明るくなく、具体的な使用方法を示しえ

ない。また、あえて同じ容器内で保管する必要性なども説明が難しい。一方、より観念的な使用環境となる「祭祀に用いられた場合」については、祭祀の具体像が不明である以上、その使用方法も想像の域を超えない。ただし平城京右京一条二坊十四坪では、井戸の祭祀に使われた可能性が高い。使用された土器が祭祀後に井戸の底に収められたとする見解もあり、仕切り板を備える須恵器も、内部に異なる二種類の物質を入れて供献した後に、井戸内に納められたのかもしれない。また祭祀に使用されたと考えるとき、「内容物を外に出す際に混合すること」が主体的に意味を持つ可能性がある。例えば、富山県西部地域から石川県にかけて、今も残る「水合せ」は、新郎新婦の両家から汲んできた水をひとつの盃に注いで飲む婚礼儀式の一つで、観念的に異なる^(注17)とされる両家の水を混合し飲むことで、帰属変更や同族意識の共有を行う儀礼である。こうした現代の儀礼が古代にまで遡るとは考え難いが、別々のものと観念された二つの物質を同じ容器内に分けて収め、取り出す際に混合させる象徴的な儀礼で使用された可能性を挙げたい。最後に「寺院に搬入された場合」についてであるが、寺院のどこで使用されたかは明らかではないものの、何かしらの仏具として使用されたとと思われる。飛鳥時代以降には、銅鏡や鉄鉢をはじめとする金属製の仏具を模倣した須恵器が生産されており、奈良時代には水瓶もみられる。金属製の仏具を模倣した定型的な陶製の水瓶、浄瓶、垂字形華瓶などは平安時代に生産量が増加するが、それ以前の寺院でも同様の用途をもつ容器は使用されたであろう。ここでは、仕切り板を備える須恵器は定型化以前の水瓶、浄瓶、花瓶などの役割を担ったと考えたい。この場合、「仕切り板を備える」という特徴の意義が問題になるが、左右に異なる仏花を挿す際に混合しないようにした、などを想定しておく。

4. おわりに

仕切り板を備える須恵器について、出土地域や時期について整理し、その用途について検討してきた。仕切り板を備える須恵器は8世紀を中心に製作され、「寺院に搬入された場合」、「祭祀に用いられた場合」、「須恵器や瓦の製作過程で使用された場合」が考えられる。その使用の際には、内部に異なる物質を納め、内容物を外に出す際には混合することを前提とした使用方法と考えられる。とくに祭祀においては二つの物質を同じ容器内に分けて収め、取り出す際に混合させる象徴的な儀礼で使用された可能性を挙げた。

類例が少なく、出土状況も判然としないものが多いため、推論に推論を重ねたまとまりのない結論となってしまった。今後、出土例が増えた際、その具体的な使用状況や意義を検討する上での一助になれば幸いである。

本稿を執筆するにあたり、京都府教育庁指導部文化財保護課の桐井理揮氏には、類例を紹介いただき大変お世話になった。また、京都府立丹後郷土資料館の松尾史子氏には資料見学でお世話になった。末筆ながら深謝申し上げます。

(なむら・たけひこ＝当調査研究センター調査課第2係調査員)

- 注1 菱田哲郎 1996『須恵器の系譜』歴史発掘10 講談社
- 注2 石木秀啓・久住愛子・北川貴博・上田龍児・大里弥生 2008『牛頸本堂遺跡群』Ⅵ（大野城市文化財調査報告書第80集）大野城市教育委員会
- 注3 牛頸窯跡群の編年は舟山良一・石川 健 2008『牛頸窯跡群』—統括報告書Ⅰ—（大野城市文化財調査報告書第77集）大野城市教育委員会による。
- 注4 長谷川 達・瀬古諒子 2015「丹後地域採集の考古資料」『丹後郷土資料館だより』第4号 丹後郷土資料館
- 注5 篠原豊一・三好美穂 1991「近鉄西大寺駅北地区市街地再開発事業に伴う調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成2年度 奈良市教育委員会
- 注6 上野 章 2003「安居窯跡群」『富山県ボランティア埋蔵文化財保護活動事業発掘体験講座 婦負郡婦中町勅使塚古墳・中新川郡上市町永代遺跡・東砺波郡福野町安居窯跡群・射水郡小杉町中山中遺跡発掘調査報告』（富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第21集）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所、名村威彦 2017「環状瓶の製作技術とその系譜」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第9号 広島大学大学院文学研究科考古学研究室
- 注7 窯構造の分類については窯跡研究会によって設定された名称（森内秀造 2010「窯構造の分類」『古代窯業の基礎研究—須恵器窯の技術と系譜—』窯跡研究会）による。
- 注8 上野 章・岸本正敏・神保孝造・斎藤 隆 1984『小杉流通団地内遺跡群第6次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 注9 鶴田典昭・中島英子 1997「池田端窯跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13—小布施町内・中野市内その1・その2—』（長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書24）日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター
- 注10 前掲注9と同じ
- 注11 前掲注9と同じ
- 注12 名村威彦 2020「古墳築造終焉後の環状瓶（下）」『京都府埋蔵文化財情報』第138号（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注13 久世康博 2000「井戸はどうして埋められたのか（土器を入れる）」『研究紀要』第7号（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 注14 山本 博 1970『井戸の研究』綜芸舎、鐘方正樹 2003『井戸の考古学』同成社
- 注15 原田憲二郎 2020『ナニこれ！？—平城京出土の用途不明品—』奈良市教育委員会
- 注16 なお、平城京右京一条二坊十四坪は隣接して西隆寺が、家ノ下遺跡は丹後国分寺が近接しており、牛頸本堂遺跡群では8世紀後半に村落寺院と考えられる大型の掘立柱建物が検出されている。このように寺院周辺の遺跡で出土することは注目される。
- 注17 伊藤曙覧 1973「人の一生」『富山県市』民俗編 富山県、八倉巻敬子 1991「入家儀礼について」富山のくらし研究（第16報）『富山女子短期大学紀要』富山女子短期大学
- 注18 大西 遼 2022「平安のやきもの400年のうつろい」『平安のやきもの—その姿、うつろいゆく』愛知県陶磁美術館

首長居宅としての竪穴建物二態 —古墳時代中後期の事例—

小池 寛

1. はじめに

古墳時代の首長居館には、榛名山の南麓に広がる扇状地上に位置する群馬県高崎市三ツ寺Ⅰ遺跡のように一辺86mの方形壇とその周囲を幅30～40m、深さ3～4mの濠によって区画する居館がある。一方、兵庫県神戸市松野遺跡のように区画を目的とした濠はなく、方形の柵列によって居宅である掘立柱建物群を区画する居館も確認されている。他方、京都府城陽市森山遺跡のように、周囲に点在する竪穴建物群の中であって、区画溝と柵列によって首長居宅を区画する居館や同精華町森垣外遺跡のように竪穴建物群の中であって、区画溝と柵列・堤によって居宅である掘立柱建物群を区画する居館がある。居館にも地域性や造営時期により、その構造や規模は異なっている。一方、首長居宅は、掘立柱建物か竪穴建物かの違いもさることながら、その規模により各地域首長の政治的な位置づけが表象されていると考えることが一般的である。^(注1)

本稿は、古墳時代中後期に営まれた京都府亀岡市里遺跡を中心に、首長居宅の変化を平面プランと床面積から検討することを目的としている。

2. 亀岡市里遺跡での首長居宅の検討

里遺跡は、亀岡盆地の北西部に位置し(第1図)、当調査研究センターが2001～2003年に圃場整備に伴い発掘調査を実施した。^(注2) 調査では、古墳時代中後期の竪穴建物を64基検出するとともに、棟数は僅かであるが、古墳時代後期の掘立柱建物も検出した(第2図)。特に、竪穴建物の分布密集度は高く、概ね陶邑編年TK208型式からTK209型式併行期(以下、型式名称のみ記載)が集落存続期間である(付表)。

床面から型式認定できる須恵器が出土した竪穴建物は、検出総数64基に対して29基である。ま



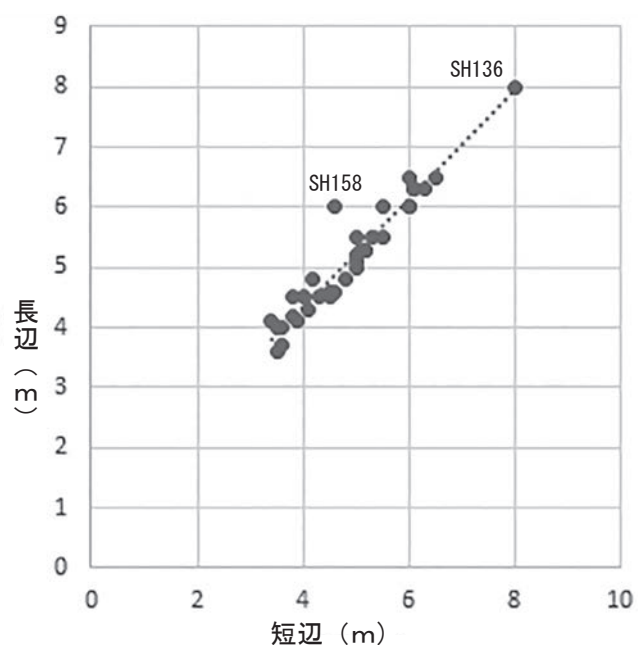
第1図 亀岡市里遺跡と周辺遺跡(1:25,000)

た、その中にあって最も竪穴建物数が多く造営された時期はTK47～MT15型式であり、25基を数えている。里集落における中心的な時期を示している。

竪穴建物の平面プランが識別できた竪穴建物は、検出総数64基に対して39基である(第3図)。その中で正方形を有する竪穴建物は32基を数えている。この比率は、古墳時代の集落遺跡の一般的な傾向であるといえる。その反面、短辺に対する長辺の比率が1:1.2から1:1.3の竪穴建物が4基確認されている。それぞれについて見ていくと、①SH99は、短辺4.0m・長辺4.6～5.3mの台形を呈する。不整な台形であるため正確な比率を算出できない状況である。意図的に台形プランの竪穴建物を造営したか否かについては類例集成によりさらなる検討が必要であるが、平面プランが台形を呈する竪穴建物の上部構造については、長辺二辺の誤差が0.7mであり、施工段階でその誤差を分散し、長方形プランの竪穴建物を建造した可能性がある。②SH158(第6図)は、短辺4.6m・長辺6.0mの竪穴建物である。短辺に対する長辺の比率が1:1.3であり、他の長方形プランの竪穴建物の中で最も長方形比率が高いことが指摘できる。竈はなく、床面には周壁溝と接続する間仕切りを示すような溝が掘られている。東辺中央には0.4mの深さで掘られた貯蔵穴が確認されている。この竪穴建物は床面積を拡張する目的で東辺を共有して竪穴建物SH136に建て替えられており、SH136は最大規模の床面積である。長方形比率が最も高いSH158から最大規模の64㎡の床



第2図 里遺跡の竪穴建物分布図(1:3,000)



第3図 竪穴建物・短辺と長辺の比率

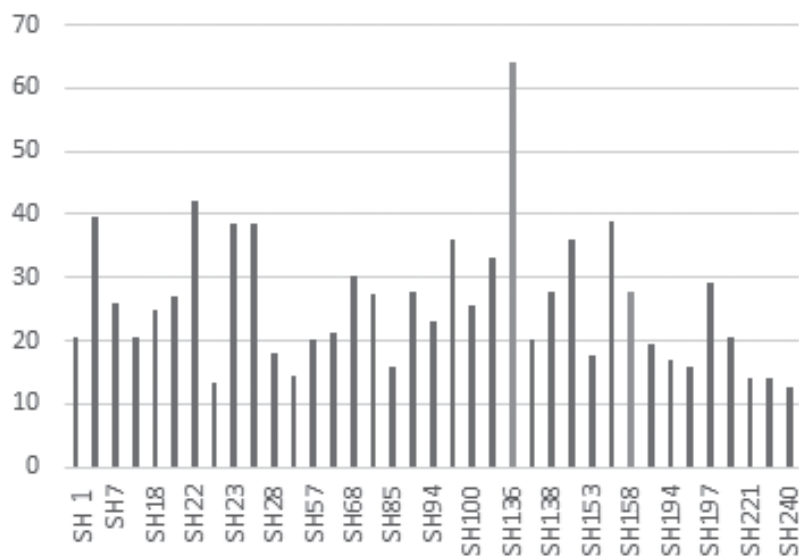
切りを示すような溝が掘られている。東辺中央には0.4mの深さで掘られた貯蔵穴が確認されている。この竪穴建物は床面積を拡張する目的で東辺を共有して竪穴建物SH136に建て替えられており、SH136は最大規模の床面積である。長方形比率が最も高いSH158から最大規模の64㎡の床

付表 竪穴建物短辺と長辺の比率

遺跡名	番号	トレンチ	住居番号	規模				主軸	時期	特筆事項・遺物
				短辺	長辺	比率	面積			
里	1	5-1	SH 1	4.5	4.6	≒ 1:1	20.7	真北 - 20° - 西	MT15	竈
	2		SH4	6.3	6.3	1:1	39.7	真北 - 34° - 西	不詳	竈
	3		SH7	5	5.2	≒ 1:1	26	真北 - 38° - 西	MT15	竈
	4		SH11	4.5	4.6	≒ 1:1	20.7	真北 - 5° - 西	不詳	
	5		SH18	5	5	1:1	25	真北 - 5° - 西	TK47	
	6		SH21	5.1	5.3	≒ 1:1	27.03	真北 - 60° - 西	MT15	竈
	7		SH22	6.5	6.5	1:1	42.25	真北 - 7° - 西	TK47 ~ MT15	竈
	8	5-2	SH2	-	-	-	-	真北 - 18° - 西	MT15	
	9		SH3	-	-	-	-	真北 - 36° - 西	TK47 ~ MT15	
	10		SH8	-	-	-	-	真北	不詳	
	11		SH9	3.6	3.7	≒ 1:1	13.32	真北	TK47	竈
	12		SH10	5	-	-	-	真北	不詳	
	13		SH23	6.1	6.3	≒ 1:1	38.43	真北	MT15	竈・甑・牛角状把手
	14		SH24	6.1	6.3	≒ 1:1	38.43	真北	TK47 ~ MT15	
	15		SH25	-	-	-	-	真北 - 32° - 西	不詳	
	16		SH26	-	-	-	-	真北	不詳	
	17		SH27	4	-	-	-	真北	不詳	
	18		SH28	4	4.5	≒ 1:1	18	真北	不詳	炉跡
	19		SH29	5	-	-	-	真北 - 28° - 東	不詳	
	20	5-3	SH56	3.6	4	≒ 1:1	14.4	真北 - 24° - 西	MT15	
	21		SH57	4.5	4.5	1:1	20.3	真北 - 36° - 西	TK23 ~ TK47 か	
	22		SH63	4.6	4.6	1:1	21・2	真北 - 10° - 西	MT15	陶器産器台・西ノ庄製塩土器
	23		SH67	5	-	-	-	真北 - 21° - 西	不詳	
	24		SH68	5.5	5.5	1:1	30.3	真北	TK23	
	25		SH69	5	5.5	≒ 1:1	27.5	真北 - 4° - 西	TK47	
	26		SH85	3.9	4.1	≒ 1:1	16.2	真北 - 37° - 西	TK47	竈、瓦泉型土師器
	27		SH93	5.2	5.3	≒ 1:1	27.6	真北 - 10° - 東	TK47 ~ MT15	
	28		SH94	4.8	4.8	1:1	23	真北	TK47 ~ MT15	
	31		SH97	6	6	1:1	36	真北 - 11° - 東	MT15	竈
	32		SH99	4	4.6~5.3	1:1.2	18.4~21.2	真北	MT15 ~ TK10	
	33		SH100	5	5.1	≒ 1:1	25.5	真北	MT15	多孔底部甑
	34		SH101	5.5	6	≒ 1:1	33	真北 - 14° - 東	MT15	瓦泉型つまみ壺蓋
	35		SH106	3.5	-	-	-	真北 - 28° - 西	不詳	
	36		SH114	3.8	-	-	-	真北 - 18° - 西	不詳	
	38	6-5	SH136	8	8	1:1	64	真北 - 24° - 西	TK47 ~ MT15	竈、甑、滑石紡錘車、有孔円板、貯蔵穴、
	39		SH137	4.2	4.8	≒ 1:1	20.2	真北 - 5° - 西	不詳	消失住居
	40		SH138	5.2	5.3	≒ 1:1	28	真北	不詳	竈
	41		SH149	6	6	1:1	36	真北 - 15° - 東	不詳	
	42		SH153	4.1	4.3	≒ 1:1	18	真北 - 40° - 東	不詳	
	43		SH154	6	6.5	≒ 1:1	39	真北 - 4° - 東	不詳	
	44		SH158	4.6	6.0	1:1.3	27.6	真北 - 26° - 西	TK47	竈、間仕切り
	45		SH193	4.3	4.5	≒ 1:1	19.4	真北 - 14° - 西	TK10 ~ TK43	竈、貯蔵穴
	46		SH194	3.8	4.5	≒ 1:1.2	17.1	真北 - 7° - 西	不詳	
	47		SH195	3.5	-	-	-	真北 - 6° - 西	不詳	
	48		SH196	3.8	4.2	≒ 1:1	16	真北 - 14° - 西	MT15 ~ TK43	竈
	49		SH197	5.3	5.5	≒ 1:1	29.2	真北 - 38° - 東	TK208	竈、甑
	50		SH198	4.5	4.6	≒ 1:1.2	20.7	真北 - 21° - 西	TK43 ~ TK209	竈、
	51		SH221	3.5	4.0	≒ 1:1.1	14	真北	不詳	
	52		SH230	3.4	4.1	1:1.2	14	真北 - 12° - 西	TK209	竈
	53		SH240	3.5	3.6	≒ 1:1	12.6	真北 - 12° - 西	不詳	竈、
鹿谷	54		SH9220	6	6	1:1	36	真北 - 40° - 西	不詳	
	55		SH9239	3.2	4.0	≒ 1:1.3	12.8	真北 - 30° - 西	TK209	

面積を有するSH136への建て替えは、双方の竪穴建物が集落内において重要な意味を有していることを示している。

③SH194は短辺3.8m・長辺4.5mであり、長方形比率が1:1.2の竪穴建物である。④SH230は短辺3.4m・長辺4.1mであり、長方形比率が1:1.18の竪穴建物である。③④



第4図 竪穴建物床面積比較図

の竪穴建物が、長方形

プランを有する竪穴建物を意図したか否かについては、比率もさることながら両辺差がわずかなこともあり、不明である。

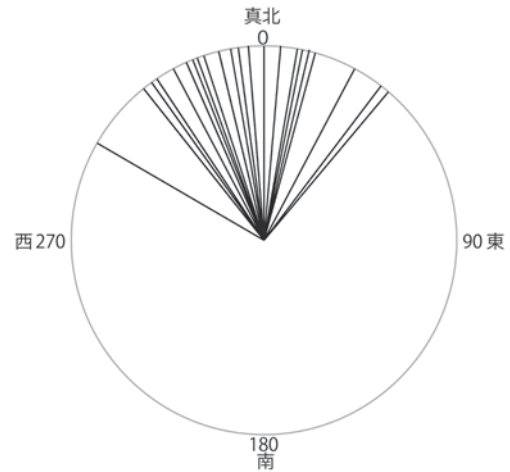
一方、床面積(第4図)は、検出した竪穴建物の中で最大規模を有する64㎡のSH136と30~40㎡の一群、20~30㎡の一群、そして、10~20㎡の一群の4群に分けることができる。また、TK47~MT15型式に築造された竪穴建物は20㎡以上であり、TK43型式以降の竪穴建物は、20㎡以下の規模である。先にみたように長方形を意図した竪穴建物の床面積を比較してみると、SH99が19.8㎡、SH158が27.6㎡、SH194が17.1㎡、SH230が14㎡を測る。SH158の27.6㎡を除いては、20㎡以下の小規模な竪穴建物であることがわかる。長方形プランのなかで最も大きい床面積を有するSH158は、全体の中では20~30㎡の中規模に属するが、長方形比率が最も高い平面プランを有していることを考え合わせると、他の長方形プランの竪穴建物にはない集落内での役割を有していた可能性が指摘できる。

最大規模を有するSH136は、先に述べたように長方形プランのSH158の建て替えによって建造された竪穴建物である。SH158は、意図的に長方形に建造された構造に最大の特徴があるが、その後、最大規模を有する竪穴建物SH136に建て替えられていることは、両竪穴建物の集落内での役割を考えるうえで非常に重要な特徴である。

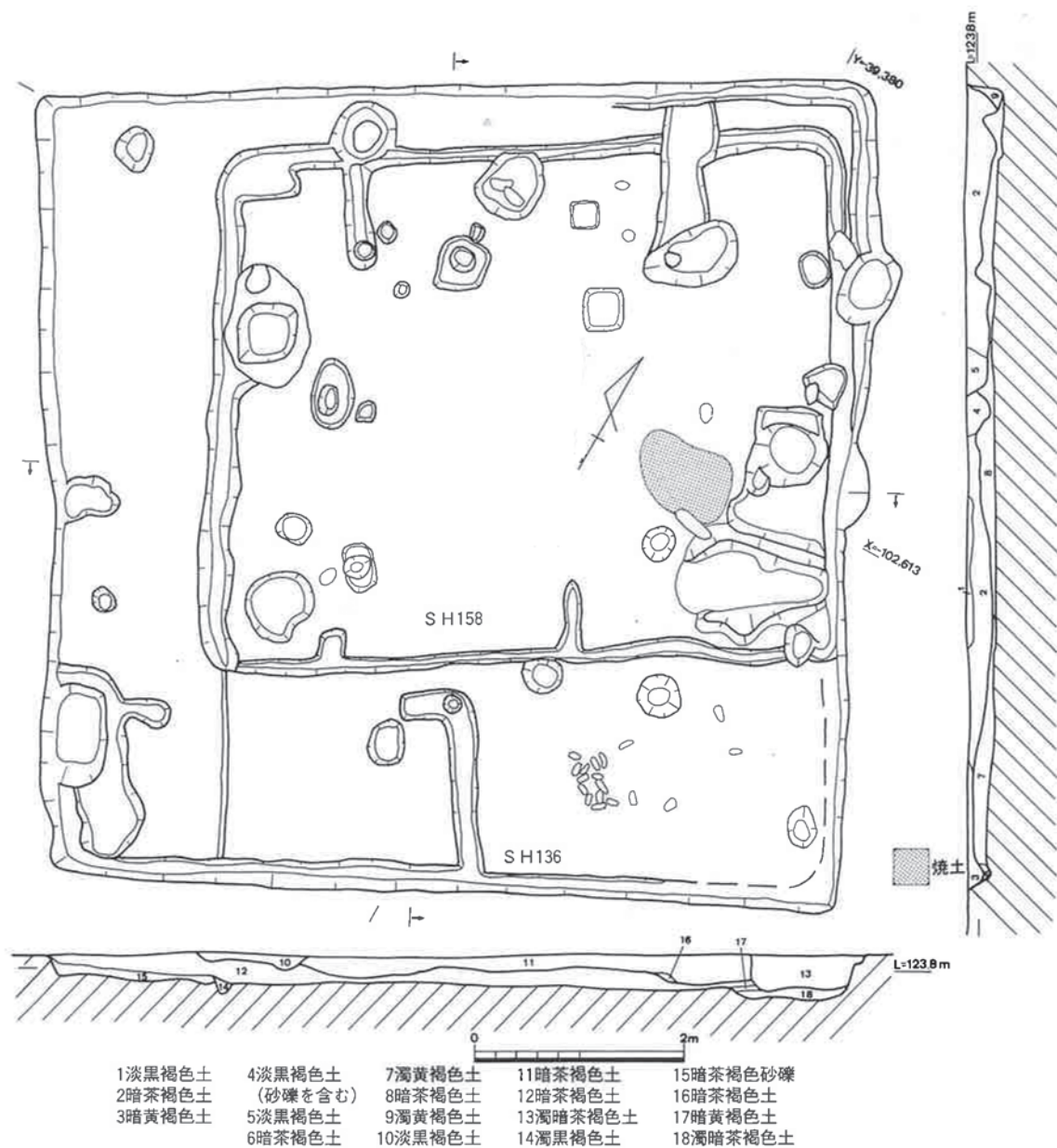
最後に、竪穴建物の主軸について見ておきたい(第5図)。調査区域は、北方に設定した5次1トレンチでの遺構検出面の標高が125.4m、中央部に位置する6次5-1トレンチでの遺構検出面の標高が125m、南端に設定した5次3トレンチでの遺構検出面の標高が122.5mであることから基本的な地形として北西から南東方向にかけて緩やかに傾斜する地形をしており、傾斜角度自体は1.7度である。検出した竪穴建物の方位を計測すると、真北を中心に東西に20度以内に主軸をもつ竪穴建物が大半であることから、建物主軸は、概ね地形の傾斜に沿うように設定されていることがわかる。一般的に掘立柱建物によって構成される首長居館は、真北に主軸をもつ建物が

数多く確認されているが、里集落において真北の主軸をもつ竪穴建物は、全体の25%を占めるものの、竪穴建物の規模や平面プランなどからその主軸は、特別な意図はないと解釈しておきたい。

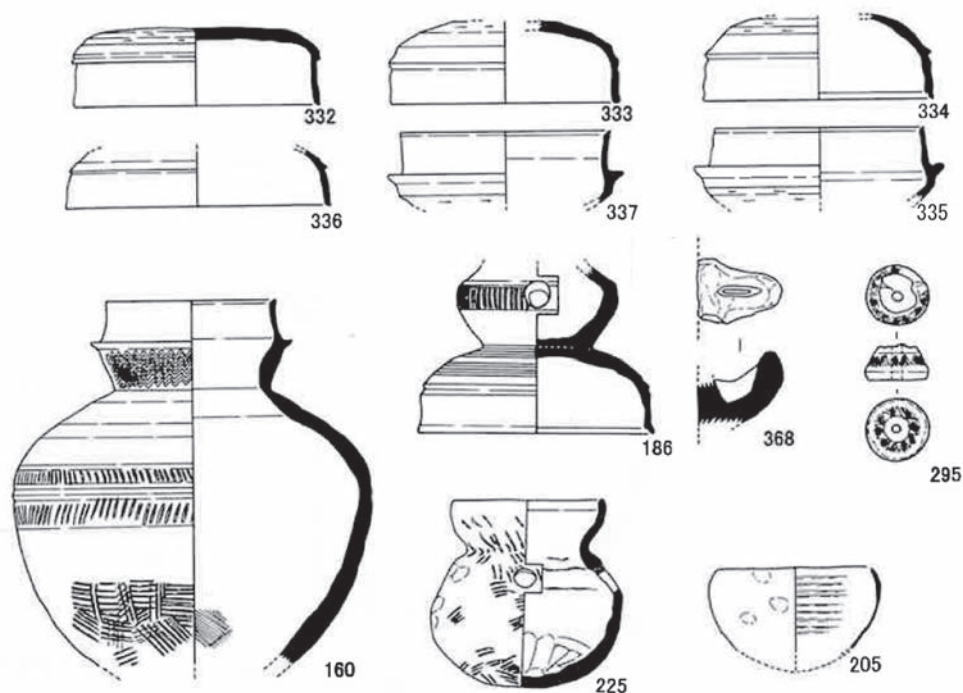
以上、平面プラン、床面積、主軸から各竪穴建物を概観した。先に述べたように長方形比率が最も高いSH158から最大規模を有するSH136への建て替え(第6図)は、他の竪穴建物にはない特徴を有していることをあらためて指摘しておきたい。



第5図 竪穴建物主軸方位図



第6図 竪穴建物136・158実測図



第7図 特徴的な出土遺物

3. 里集落の特徴を表す出土遺物について

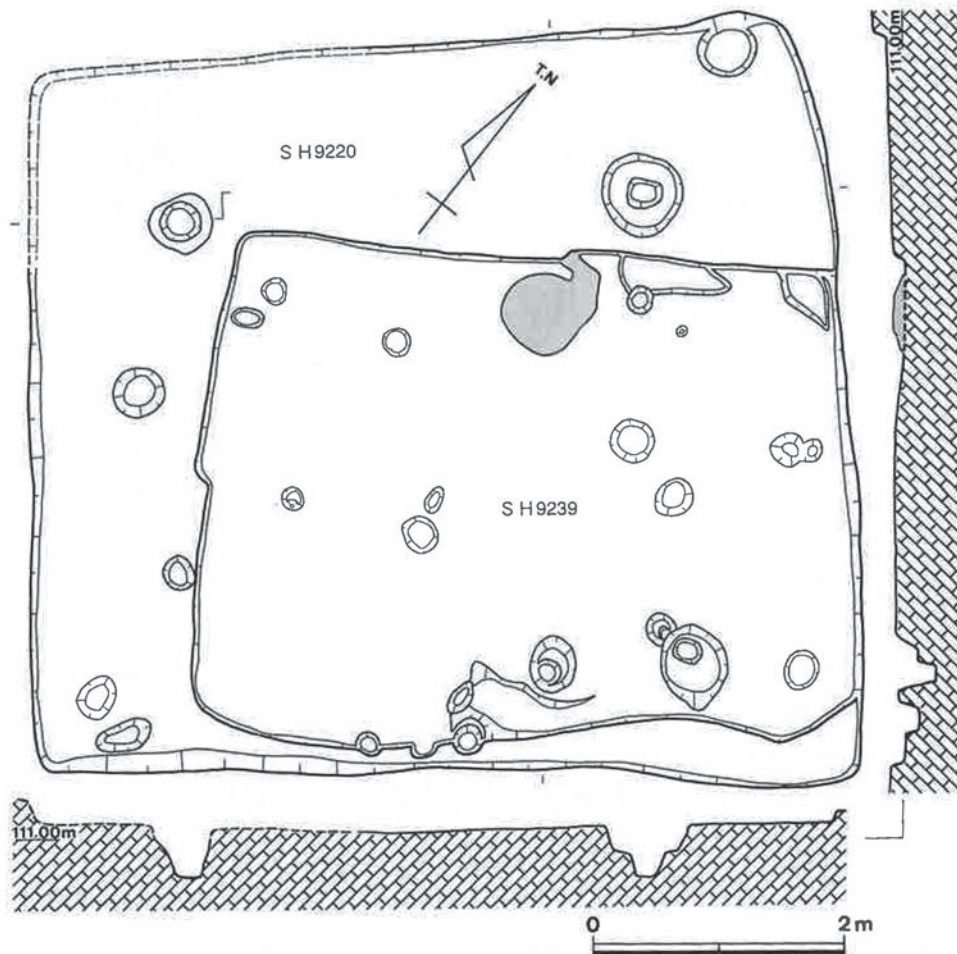
里遺跡の発掘調査では、各竪穴建物から土器を中心とする遺物が出土しており、明らかに型式認定できる竪穴建物は全体の45%である。ここでは、里集落の特徴を表出し得る出土遺物について見ておきたい。

SH197からは第7図332～337に示すようにTK208～TK23型式に比定できる須恵器が出土しており、当該遺跡の集落形成期を示す遺物として重要である。また、SH93からは蓋及び脚付きの壺(第7図160)が出土しており、SH101からは甕形のつまみを持つ壺の蓋(第7図186)が出土している。これらの須恵器は、一般的に埋葬施設から出土する傾向が強い器種であり、集落での出土は稀有である。何らかの宗教的行為が行われたことを示している。

一方、SH85から出土した土師器甕(第7図225)は、須恵器甕を土師器で模した土器である。須恵器甕が有する特徴は失われているが、口縁部がラッパ状に長く広がらない特徴と体部が形骸化していないことからTK23からTK47型式の甕が原型となっている可能性が高い。竪穴建物SH99などにおいても須恵器甕の出土がみられるが、敢えて土師器で模倣されていることは、集落内において宗教的行為が行われたことを示唆する遺物として重要である。

先に述べたように里遺跡の竪穴建物からは、数多くの須恵器が出土している。出土須恵器の大半は、生産地を特定できない個体であるが、胎土・焼成・成形などから確実に大阪府陶邑古窯址群から搬入された須恵器が含まれている。一方、中央にスリットの入る朝鮮半島系の土師器甕の把手(第7図368)が出土している。当該資料だけで朝鮮半島との関係性にまでは言及できないが、他地域との交流があったことは首肯できる土器資料であろう。

交易を示す土器資料として製塩土器(第7図205)がある。丸底の椀形を呈しており、内面には



第8図 鹿谷遺跡竪穴建物9220・9239実測図

横方向の貝殻条痕が顕著である。暗紫色及び暗赤褐色の色調を呈し、器壁も薄く、堅緻である。これらの特徴から当該資料は、和歌山県紀淡海峡に所在する西庄遺跡からもたらされた製塩土器である。竪穴建物からの製塩土器の出土は点数的には僅かであるが、確実に交易品としてもたらされた資料として重要である。最後に、第7図295は、外面に鋸歯文をもつ滑石製の紡錘車である。紡錘車としては、唯一の出土であるが、集落内で加工された紡錘車ではなく、製塩土器同様、他地域から交易によって搬入された製品であろう。

4. 長方形竪穴建物から最大規模の竪穴建物へ(まとめにかえて)

里集落は、古墳時代中後期にあって竪穴建物によって構成される集落であることから、当該地周辺を広く統括する集落とは考えられない。しかし、竪穴建物の密集度は高く、TK208型式から集落が形成され、TK47～MT15型式にピークを向かえることが確認できた。集落を構成する竪穴建物についても、一般的にみられる規模と構造である。その中で、長方形プランを有するSH158は、平面プラン自体がほかの竪穴建物とは異なっている。さらに上部構造体の外観は、集落に住まう人々の目を引く存在であったと想像できる。一方、長方形プランを有するSH158の建て替えは、外観的な特徴から最大規模を有する竪穴建物SH136へと変貌する。特徴的な外観から

最大規模を有する竪穴建物への変化は、両竪穴建物が、変わらず集落首長が住まう居宅であったことを示している。

建て替えにおけるこのような変化は、里遺跡だけではなく、同稗田野町に所在する鹿谷遺跡(第8図)でも確認されている。^(注3) SH9239は、短辺4.1×長辺5.3mの長方形プランの竪穴建物で、比率は1:1.3である。その後、当該建物は一辺6.7m、床面積が50㎡の正方形プランの竪穴建物SH9220へと建て替えられる。里集落の竪穴建物群においても50㎡前後の竪穴建物は、規模の大きい一群であることから、鹿谷遺跡の両竪穴建物は、里集落と同様、集落首長が住まう居宅として存在していたことを示している。(こいけ・ひろし 当調査研究センター調査課長)

注1 石野博信 1990『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館

注2 小池 寛・松尾史子 2004「里遺跡第3・5・6次」『京都府遺跡調査概報』第112冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004

注3 野島 永・河野一隆 1993「鹿谷遺跡」『京都府遺跡調査概報』第52冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター



写真 里遺跡竪穴建物群検出状況(上が北)

中世丹後の土師器皿

加藤 雄太

1. はじめに

近年丹後地域の発掘調査事例が増加している。その中には中世の遺跡を取り扱うことも多くなっているものの、中世段階の遺物については国産陶器や輸入陶磁から年代を検討することが多く、最も多く出土する土師器皿では年代を決めかねている節がある。

このため土師器皿において現状確認できている資料群を取りまとめ、雑駁ではあるものの

およその組列を提示することを本稿の目的としたい。

当初は丹後地域から出土する中世遺物を総覧し位置付けを明らかにすることを目的としていたが、収拾がつかず、今回は土師器皿のみに終始した。なお、遺物は報告書を再トレースした。



第1図 本論言及の遺跡位置図

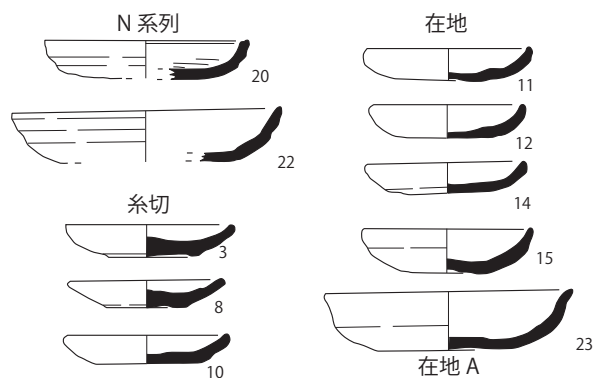
2. 編年の基準資料

丹後地域として本稿では与謝野町、宮津市、舞鶴市の遺跡から出土した資料を取り扱う。これらの資料は、土師器皿の出土が一定数確認できることから選択したものである。

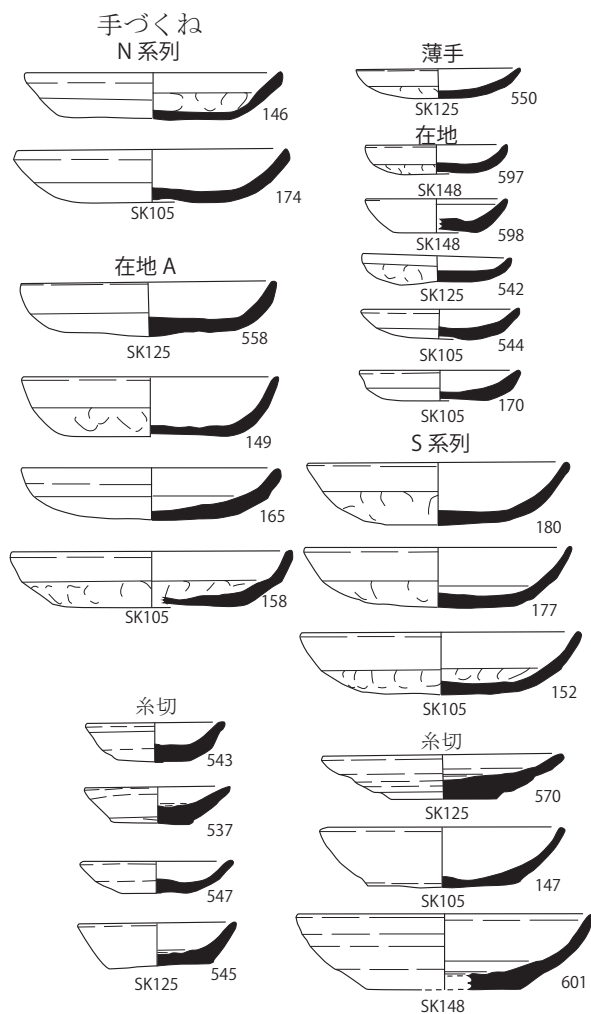
それでは今回の検討に使用する遺跡について概観したい。

(1) 桜内遺跡(与謝郡与謝野町加悦)

丹後地域の加悦谷に流れる野田川東岸に桜内遺跡が立地する。この遺跡からSE02を取り上げたい。SE02は底から黒色土器、黒色皿、東播系須恵器鉢、土師器皿が出土しており、そのうち土師器皿は4枚重なった状態で投棄されたことが確認されている。東播系須恵器鉢の年代から12世紀後半ごろの資料と考える。



第2図 桜内遺跡出土の土師器皿



第3図 大川遺跡出土の土師器皿

片、同安窯系青磁碗 I-1bが出土している。

SK125は掘形底面で焼土が確認された土坑である。東播系須恵器鉢の口縁部片が出土している。土師器皿のほか、青磁皿、白磁、東播系須恵器鉢が出土している。年代は12世紀後半から13世紀前半の年代の資料ではないかと考える。

(3) 満願寺跡(舞鶴市万願寺)

日本海に面する西舞鶴に流れ込む伊佐津川と池内川が合流する地点の東側に位置する。満願寺の創建は本尊の墨書を根拠として建保6(1218)年とされている。この遺跡からは第2次調査の整地層第21層を取り上げたい。

整地層第21層は満願寺の鎌倉時代の整地層と想定されている。平安・鎌倉時代に一度焼亡した満願寺が復興する際に行われた整地の痕跡で平安・鎌倉時代の建物を覆う炭化物層から出土した炭化米の年代1217～1266年および21層中の常滑5型式の甕から13世紀前半の資料と考えられる。

(4) 難波野遺跡・難波野条里制遺跡(宮津市大垣、難波野、江尻)

日本三景の一つである天橋立の北側に位置する。

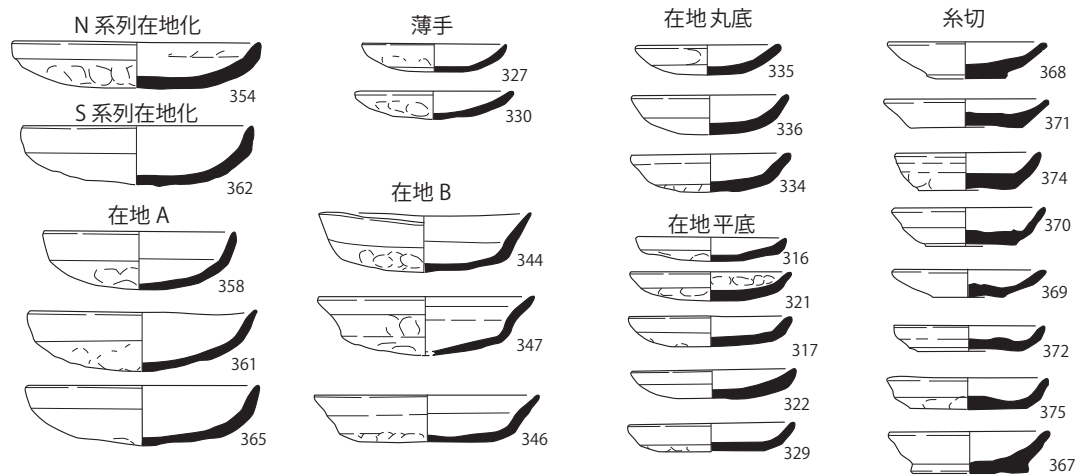
SX01は石積み遺構で、杭で裾部を固定した石積み遺構であり、何らかの建物の土台であると

(2) 大川遺跡(舞鶴市大川ほか)

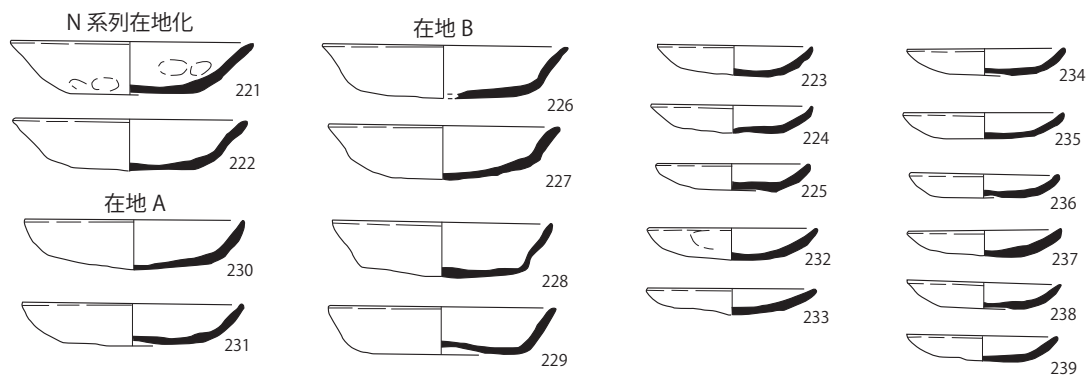
舞鶴市西部を南北に流れる由良川下流域左岸に立地する大川遺跡は、平安時代には『延喜式』式内社である大川神社が調査地の西側に位置し、周辺の尾根には中世に城館が築かれ、下流の中山城では戦国時代の建物や曲輪が確認されている。大川遺跡の調査では南北500mにわたって平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物、井戸等が確認された。集落の北端では、鍛冶工房跡が確認され、それに伴う居住空間も形成されていたことが分かっている。

SK105は掘形平面形の隅丸長方形の土器埋納土坑である。土坑内から土師器皿37枚が出土したほか須恵質の鉢片が出土した。鍛冶炉に近接し、被熱した角礫が最上部に据えられている状況などから鍛冶関係の遺構と考えられる。共伴した東播系須恵器鉢がおよそ12世紀後半から13世紀前半の年代であることから13世紀前半の資料ではないかと考える。

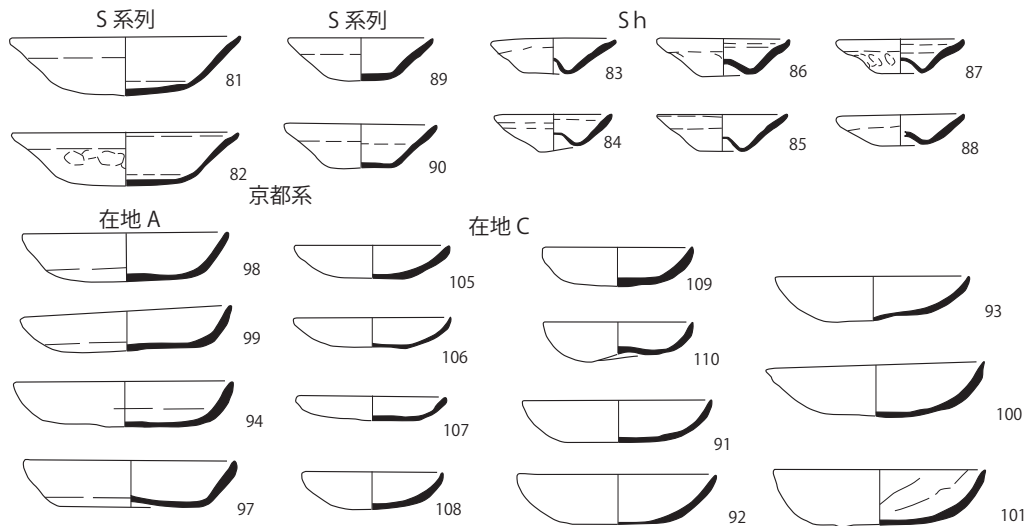
SK148は土師器皿のほか、東播系須恵器鉢



第4図 満願寺遺跡出土の土師器皿



第5図 難波野遺跡出土の土師器皿

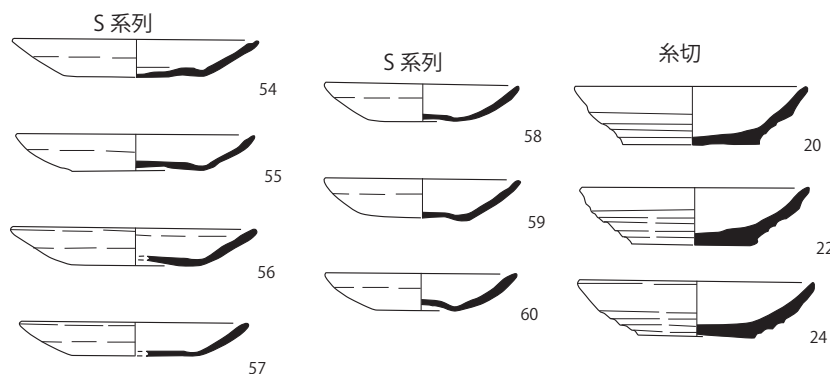


第6図 中野遺跡出土の土師器皿

考えられる。この石積みの背後の盛土部分から土師器皿などが出土した。またSX01の西側からも土師器皿などがまとまって出土している。こちらもSX01背後の盛土出土の遺物と同時期とみられる。

(5) 中野遺跡(宮津市中野)

天橋立の北岸の府中地区の中野に位置する。丹後国分尼寺及び丹後国府の推定地である。この



第7図 宮津城跡出土の土師器皿

遺跡からはS E82の資料を使用する。この遺構に関しては中畹氏により詳細な検討が行われている(中畹2017)。遺構から出土した土師器皿は京都系土師器皿と在地系土師器皿に分類される。このうち京都系土師器皿の径高

指数から京都出土の土師器皿と比較を行い、これから得られた成果などから14世紀後半から15世紀前半の年代を想定している。

(6) 宮津城跡(宮津市鶴賀)

宮津城は字鶴賀に位置する。大手川河口の東岸低地に築かれた平城で別名を鶴賀城といい、字名はこれに由来する。宮津城は天正8(1580)年からはじまり慶長5(1600)年に細川藤孝が宮津城を焼くまでの細川氏の時代(1580～1600)と、その後丹後宮津城主として京極高知が入部し、元和8(1622)年に嫡子高広が宮津に入り宮津城が再建され(1600～1625)、明治元(1868)年に廃城になるまでの京極氏の時代に分かれる。今回は第3次調査のSA0601、SK0616の資料を提示する。

SA0601からは大窯第4段階の志野が確認でき、SK0616では丹波Ⅷ期のすり鉢が確認できることから、いずれの遺構の資料も細川氏の時代の遺物であると考えている。

以上の遺跡から確認された遺物で丹後地域の土師器皿の変遷について考える。

3. 丹後の土師器皿の編年

共伴遺物等から示された各遺構を年代ごとにまとめると、12世紀後半に桜内遺跡、12世紀末～13世紀初頭に大川遺跡、13世紀前半に満願寺21層、13世紀後半に難波野遺跡、14世紀後半から15世紀前半に中野遺跡、16世紀後半に宮津城跡の遺物が位置するとした。これを踏まえて、土師器皿の移り変わりを考える(第8図)。

桜内遺跡の資料は手づくねの土師器皿とロクロ成形の資料に分けることができる。手づくねの土師器皿(20・22)は上下2段のナデが施されており、京都の土師器皿を模倣したタイプであると考えられる。そのほか口径12～13cmの体部が屈曲して外反するタイプがある。また口径8cm程度では在地の土師器皿で器高が低い皿と高い皿が確認できる。小皿は上端部が上方に突出するような傾向が看取されるので、同時期に似た特徴を有する京都の皿N^(注1)の影響がまったくないわけではないのではないのだろうか。これらの在地の土師器皿を在地Aとした。

大川遺跡の資料も手づくね資料とロクロ成形の資料が確認できる。146と174は皿Nの模倣の可能性があり、一段ナデに見える外面に上端部が上方に突出し、断面が三角形を呈している。180、177は皿S^(注2)の模倣で底部が平坦で広く口縁部が丸みをもっている。このほか体部の立ち上がりの

つよい在地Aは平底傾向のタイプとして分けた。小型さらには一部器壁の薄いタイプが確認できる。また回転糸切の土師器皿には大型のタイプと鉢が確認できる。

満願寺整地21層も手づくねとロクロ成形の土師器皿がある。354は皿Nの模倣系譜の資料と考えられるが、断面の三角形が肥大化し、口縁端部には面を有するように在地化がみられる。362は皿Sの模倣系譜であると考えられるが、器壁は厚く皿Nの模倣品と同じく在地化が著しい。そのほか在地Aは丸底化し形が大きく崩れる。在地Bは外面に強く外反する。口径8～9cmの小型皿は丸底と平底の資料があり、平底皿の資料はロクロ成形の一部の資料と似て底部と体部の境が明瞭である。

難波野遺跡の資料は皿Nの在地化が著しい。221・222は底部と体部の境の屈曲が強く、口縁端部につまむようなやや外反する断面形が確認できる。出土資料に限られるもののロクロ成形の資料が確認できないので、この段階では生産量が少ないのか小型の手びねり皿と競合したのであろうか。

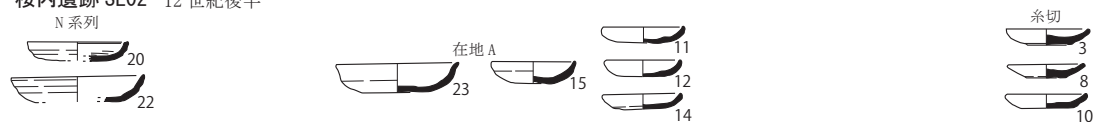
中野遺跡の資料は京都系土師器皿として皿Sに大皿、中皿、小皿、へそ皿が確認できる。京都産の可能性はある。在地Aは口縁部から体部にヨコナデを施しており、中畠陽太郎によれば「中世前半期京都系土師器皿模倣タイプの末期の様相」との指摘がなされている(中畠2017)。同氏は在地系の土師器皿を6つに分類しているが、本稿では大きく在地Aと在地Cとした。在地Cは外面の調整が鮮明でなく、口縁部不整形で薄手である。

宮津城跡は皿Sとロクロ成形の土師器皿が出土している。内面に強いナデを施して凹線の圏線状痕跡が入る。京都で同時期に生産されていた皿Sの内面に圏線を施す特徴をとらえて模倣した在地の資料であると考ええる。また回転糸切の土師器皿は口径10cmに満たないものがほとんどで見込みは丁寧な調整が施されている。

本稿では12世紀後半から16世紀後半までの丹後の土師器皿を概観したが、分類した土師器皿がどのような変遷をたどるのか、またどのような外部からの影響が想定できるのかを簡単ではあるが取りまとめた。桜内遺跡や大川遺跡の資料が確認できる12世紀後半から13世紀は、中井淳史によれば全国的に京都のかわらけが模倣される時期にあたる(中井2022)という。確かに桜内遺跡のN系列とした土師器皿や大川遺跡のN系列とした土師器皿は京都の皿Nに似せたのではないかと思わせる断面形や口縁部の調整を残している。全国的な影響を丹後地域も受けていたと考えられる。N系列の土師器皿はその後、満願寺の資料にすでにみられるように在地化が進み、京都の土師器皿の情報が入ってきていないことをうかがわせる。難波野遺跡に関しては完全に在地化している。

大川遺跡から確認できるS系列の土師器皿は、京都では白い精土が用いられた資料である。S系列として一応形を似せる意図があったのであろうが、13世紀前半の段階で在地の土師器皿の影響をうかがわせる。満願寺跡の皿Sは在地化しており、皿Nと同じく情報が入ってきていないのかもしれない。皿Sは、この後中野遺跡で確認できるが、こちらは京都の資料である可能性が高い。中畠氏によると中野遺跡内においても、このタイプの皿Sはなく、直接の前後関係をうかが

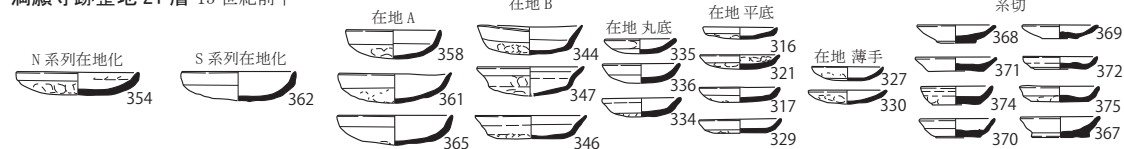
桜内遺跡 SE02 12 世紀後半



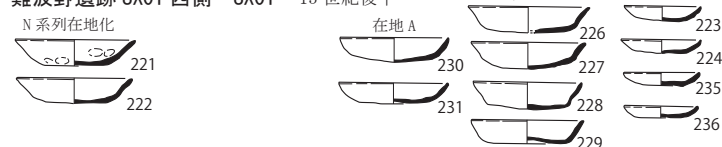
大川遺跡 12 世紀末～13 世紀初頭



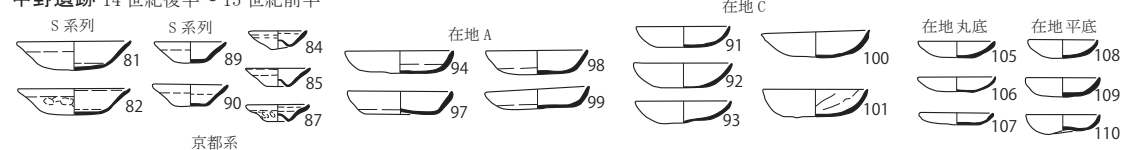
満願寺跡整地 21 層 13 世紀前半



難波野遺跡 SX01 西側 SX01 13 世紀後半



中野遺跡 14 世紀後半～15 世紀前半



S=1/6

宮津城跡 16 世紀後半



第8図 中世丹後の土師器皿編年案

わせる資料も確認できない(中畠2017)という。この資料については同論中に指摘がなされており、足利義満が何度か九世戸(天橋立)参詣を行った際の宴会後の廃棄の資料である可能性があるという。宮津城では京都で同時期にみられる見込みに圈線が入る特徴を持つ土師器皿が確認できた。中井氏によれば、「全国的に京都のかわらけを模倣する時期は前述の12世紀後半から13世紀と、15世紀末から16世紀がある」(中井2022)ようで、宮津城は後者の段階で入ってきた影響を受けているかもしれない。しかしながら、京都の土師器皿と特徴がよく似ていることから、宮津城の土師器皿はその後も影響を受けていた、もしくは京都の土師器皿が搬入されていた可能性があると思っている。

在地の土師器皿とした在地Aの資料は、桜内遺跡の段階では皿Nの影響を多少は受けた外面の調整をおこなっているように看取できたが、後年の大川遺跡では皿Nと皿Sの両者を合わせたような形になり本論の扱いに迷いが残る。満願寺跡では皿Sにわずかに似たような口縁部の特徴をもつ。在地Bは満願寺跡から確認できる形のくずれた土師器皿で底部と体部の境が明瞭である。この資料は13世紀代でおさまる資料であろうか。在地Cは中野遺跡のみで確認した。

また12世紀後半段階から13世紀前半の満願寺跡まで確認できるロクロ成形の土師器皿は、16世紀後半の宮津城跡で再び確認できるが、今回確認できなかった時期に生産が行われていたか否かや、細分が可能なのかなど課題が残った。

12世紀後半から16世紀後半の限られた資料の中での検討であるが、12～13世紀に京都の影響を受けた模倣品が生産され、その後情報が入らず在地化していくこと、そしてそれ以外の在地の土師器皿が同時期に存在していること、中野遺跡と宮津城跡に関しては京都との関係性が強く、直接資料が搬入されているなど、ほかの遺跡とはことなる状況が起こっていた可能性があることが示唆できる。

4. まとめ

本稿を執筆する契機は、中世の丹後の遺跡を調査するにあたって土師器皿が多く出土するにもかかわらず不明なことが多く、一度整理する必要があるだろうと考えたところにあった。しかしながら執筆するにあたって調査・検討を進めていくうちに資料の不足や、広範な丹後地域をひとくくりにしてまとめてしまうことの危うさなど多くの問題や懸念材料が明らかとなり、このような中途半端な形となってしまった。今後は本稿を参考に丹後地域の他の土器なども含めた俯瞰的な出土遺物の整理が必要になってくると思われる。

(かとう・ゆうた＝当調査研究センター調査課調査員)

注1 京都の土師器皿は、大きく3つの系列に集約される。古代から続く皿A、皿A派生の褐色の皿N、中世からみられる白色の皿Sである。これらの系列については、平尾政幸2019「土師器再考」を参照されたい。

注2 注1に同じ

参考文献

- 平尾政幸 2019「土師器再考」『洛史 研究紀要』第12号 (公財)京都市埋蔵文化財研究所
- (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1993「国道176号関係遺跡(3)桜内遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第54冊
- (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2016「大川遺跡発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告書』第164冊
- (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2021「満願寺跡第2次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告書』第181冊
- (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2008「難波野遺跡・難波野条里制遺跡、大垣遺跡・一の宮遺跡平成18・19年度発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告書』第128冊
- 中畠陽太郎他 1983『中野遺跡第4次発掘調査概要』宮津市教育委員会
- 中畠陽太郎他 1985『宮津城跡第3次発掘調査概要』宮津市教育委員会
- 伊野近富 1996「中世土器の編年(中)」『京都府埋蔵文化財情報 第59号』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 中畠陽太郎 2017「中野遺跡出土の貿易陶磁器と中世後期京都産土師器—中世丹後府中の考古学的解明に向けて—」佐々木達夫編『中近世陶磁器の考古学』第7巻 雄山閣
- 日本中世土器研究会編 2022『新版概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 中世土器研究会 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 藤澤良祐 2005『瀬戸窯跡群』同成社
- 宮津市史編さん委員会 1996『宮津市史 史料編第一巻』宮津市役所
- 中井淳史 2022『中世かわらけ物語 もっとも身近な日用品の考古学』吉川弘文館

城谷口古墳群出土のソケット式 鉄鏃の類例についての覚書

中川和哉

1. はじめに

城谷口古墳群は、現在の京都府南丹市八木町北広瀬に所在する古墳時代中期から後期に築かれた古墳群である。中期の古墳は方墳で、後期になると墳形が円墳に代わる。平成17年から平成18年まで2年度にわたり方墳3基、円墳8基の発掘調査を実施した。^(注1)円墳の埋葬施設はすべて横穴式石室であった。発掘調査を実施した横穴式石室を持つ円墳のうち最も築造年が古いのは2号墳で、陶器TK10型式の須恵器が出土している。2号墳の石室は比較的小型横長の石材(粘板岩)を積んだ羨道部の短い両袖の石室で、初葬時には三方向に石障を持っていたと想定できる。出土遺物には類例の少ない鉄鐸・蛇行剣がある。また管見のためか、それらと一緒に類例が見つからない特殊な鉄鏃が3点出土している。今回は韓国で同形態の鉄器の例があるため覚書として紹介したい。

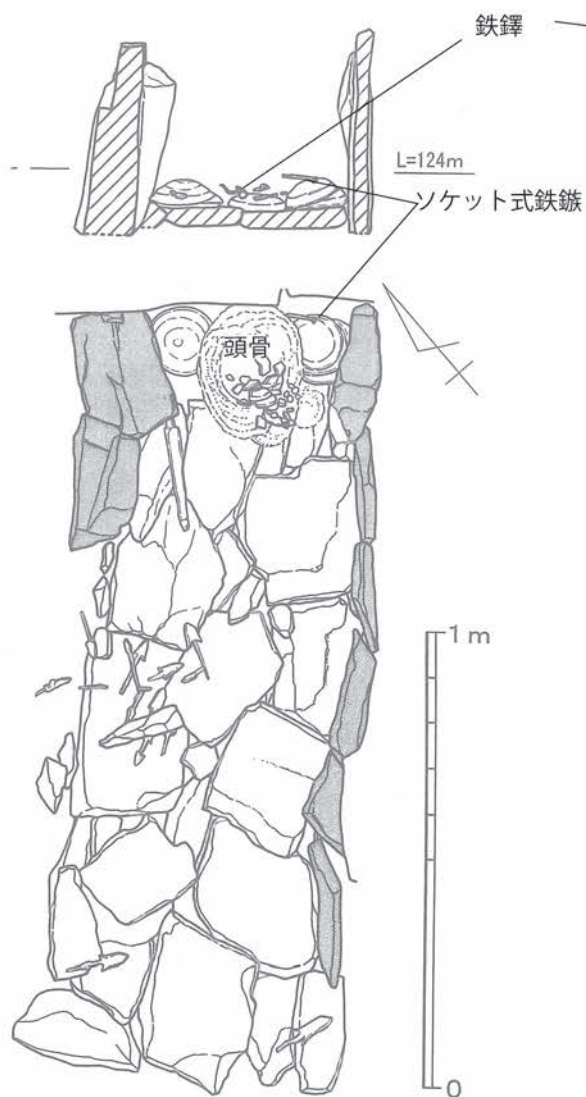
2. 城谷口2号墳出土のソケット式鉄鏃

城谷口2号墳から出土したソケット式鉄鏃は3点(第2図左下)で、そのうち1点は鏃身部分を欠いている。2・3は追葬で現位置が動かされて可能性があるが、1は石障内の追葬によって壊されず残った部分から出土しており、頭骨や転用枕などと同じく現位置を保っているものと考えられる。転用枕に利用された須恵器の杯蓋、杯身から6世紀の年代が与えられる。鉄鏃は頭骨の左側の杯蓋の上から出土している。

鉄鏃はすべて鍛造で鏃身部は先端部が尖り、両側縁はわずかに湾曲し逆棘がある。頸部は断面が長方形になり、基部側は鉄素材を板状に打ち延ばした後丸く中空になるようソケット状に加工している。2には内面に中空の木質が残されており竹の可能性もある。石室内で出土した他型式の鉄鏃に残された矢柄と同じ径である。石障内の頭骨と転用枕の間から鉄鐸(第2図右下)が出土している。鉄鏃1とは近接した位置である。3点の鉄鏃は図で見られるようにほぼ同じ規格で作られている。



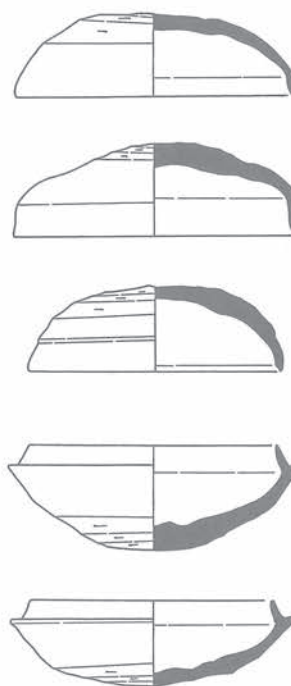
第1図 城谷口2号墳位置図



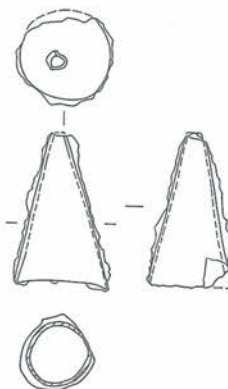
城谷口2号墳石障内遺物出土状況



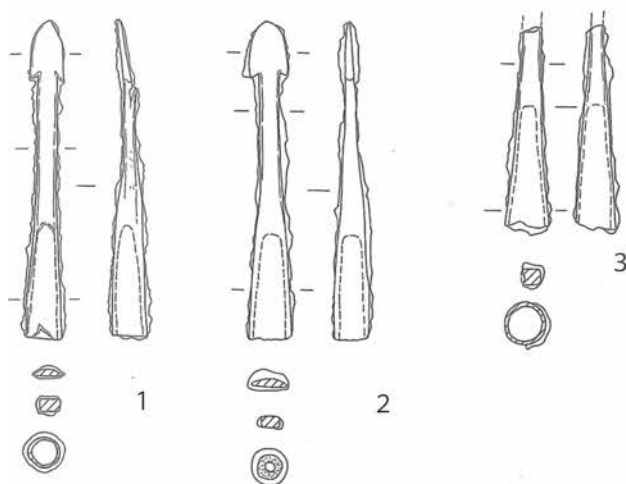
頭骨除去後



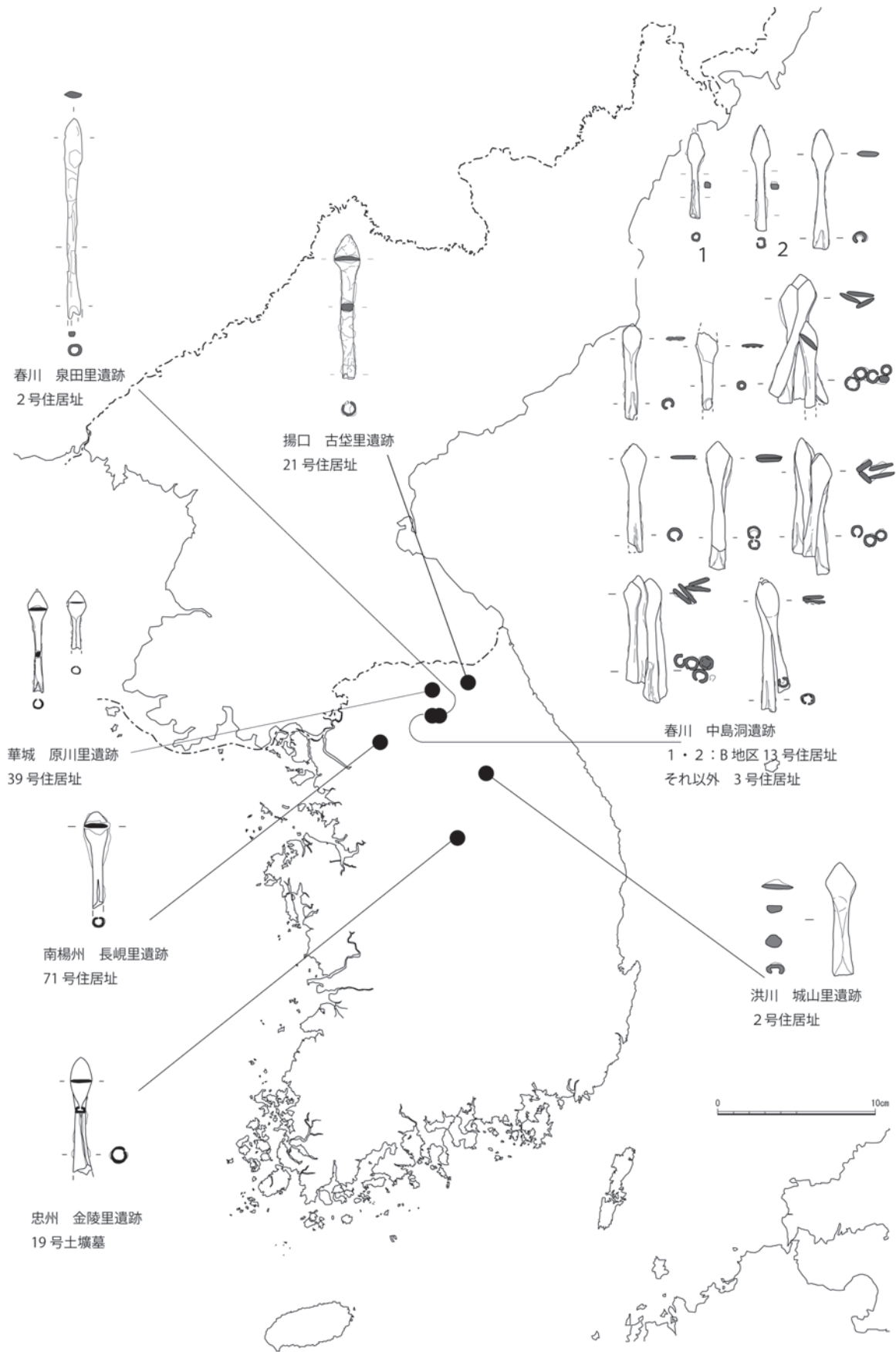
転用枕に使用された須恵器



鉄鐸



城谷口2号墳出土ソケット式鉄鏃



第3図 朝鮮半島での出土例

3. 韓国出土のソケット式鉄鍬

韓国では城谷口2号墳と同じ6世紀のソケット式鉄鍬は検出されてないようであるが、原三国時代の遺跡からソケット部を持つ鉄器が発見されている。その発見地域は第2図に見られるように京畿道、江原道、忠清北道で韓国の北部にまとまっており、馬韓又は初期の百済地域にあたりとされる。

鉄鍬は土壌墓から出土した1例を除くとすべて住居址内から検出されている。その多くが1・2点の出土であるが、江原道春川市中島洞遺跡3住居址から21本のソケット式鉄器が検出されている。鉄器のうち5組15個体は切先をそろえて出土している。こうした出土状況や住居址内で出土することが大半であることから実用品の可能性が高い。

鍬身部分には逆棘がないのが特徴で、城谷口2号墳のものとはソケット部の径が異なっているため、ヤスなどである可能性は否定できない。

4. 小結

現在までのところ城谷口2号墳から出土したソケット式鉄鍬は日本国内では確認していない。ソケット状の着柄部を持つ鍬は中国の戦国時代の青銅器などに見られ、ヨーロッパの青銅器時代以降の各時代にも散見できる。また鉄製品の故地を求める有力な地域である韓国では、5世紀、6世紀の遺跡からの出土事例は知られていないようだ。原三国時代末～百済の黎明期に地域を限って出現する形式のようである。今後、朝鮮半島や日本の中で同様なソケット式の鉄鍬が発見される可能性もあることから、覚書として資料を紹介した。

謝辞 韓国先史文化研究院禹鐘允氏、徐羅伐文化遺産研究所チャ・スン Chol氏には報告書の収集の協力とご助言をいただいた。

注1 中川和哉他 2007『城谷口古墳群発掘調査概要』（京都府遺跡調査概報第125冊）（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター、中川和哉 2007「城谷口2号墳出土の特殊な鉄製品類について」『京都府埋蔵文化財情報』第103号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注2 한강문화재연구원 2013『춘천 중도동 유적』、강원고고문화연구원 2014『春川 中島洞聚落 - 4대강 살리기사업 춘천 중도동 하중도 C지구 발굴조사 보고서 -』、春川中島洞遺跡：江原考古文化研究院 2015『春川中島洞遺蹟 - 춘천 하중도 관광 개발사업부지내 B구역 발(시)굴조사보고』、국강고고학연구소 2020『春川 中島洞遺蹟 - 춘천 중도 LEGOLAND KOREA Project A~H구역・순환구역 내 유적 발굴조사 통합보고서』
春川泉田里遺跡：국강고고학연구소 2014『춘천 천전리유적 - 춘천 천전리 118-21번지 근생시설 신축부지내 유적 발굴조사 보고서 -』
洪川城山里遺跡：강원문화재연구원 2012 홍천 성산리유적 - 춘천 ~ 동홍천간 고속도로 건설공사 문화유적(성산리) 발굴조사』
華城原川里遺跡：예맥문화재연구원 2013『화천 원천리유적 - 화천 원천리 2지구 유물산포지내 발굴조사보고서』
南揚州長峴里遺跡：중앙문화재연구원 2010『남양주 장현 5지구 주택신축부지 내 남양주 장현리 유적』
忠州金陵里遺跡：忠北大学校博物館 2007『忠州金陵里遺蹟』

令和4年度発掘調査略報

10. たつやま
立山古墳群

所在地 京丹後市弥栄町溝谷地内

調査期間 令和4年10月19日～令和5年2月27日

調査面積 560m²

はじめに 立山古墳群は京丹後市弥栄町溝谷に所在し、竹野川と支流の溝谷川の合流点から東に約1.5km遡った丘陵上に立地している。16基の古墳が確認されており、今回14号墳・15号墳の本調査と、その周辺の小規模調査を実施した。過去に調査例はなく、はじめての調査である。調査は網野岩滝線(外村バイパス)民安関連道路新設改良工事に伴い京都府丹後土木事務所の依頼を受けて実施した。

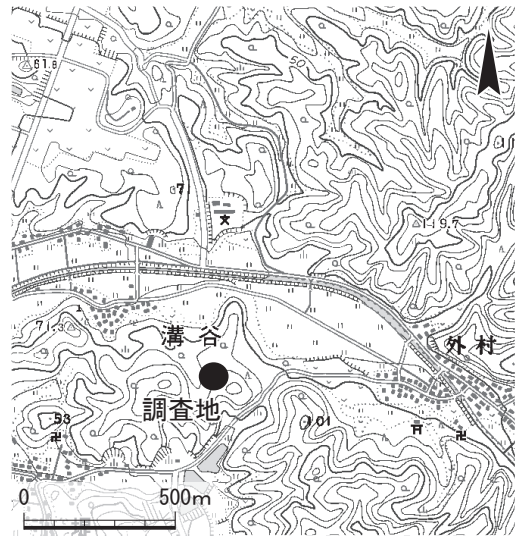
調査概要 14号墳・15号墳は、北西方向に伸びる尾根の先端に位置し、溝谷の集落が見渡せる良い立地にある。ともに墓壙を2基ずつ確認し、それぞれ鉄製品が副葬品されていた。14号墳では、尾根の主軸に直交する長方形の墓壙2基を一部重なった状態で検出した。墳丘中央部に位置する古い墓壙を主体部1、これと並行して先端側に位置する新しい墓壙を主体部2とした。主体部2から、長さ約1mの鉄刀と長頸鎌が出土している。15号墳では、尾根の主軸に直交して直列する長方形と楕円形の墓壙を検出した。短辺が少しだけ重なっており、北東側の古い長方形の墓壙を主体部1、南西側の楕円形の墓壙を主体部2とした。2つの主体部は、ともに下段を一部掘り窪めた構造をしており、そこに木棺が据えられていたと判断した。主体部1では、鉄剣と鉄鏃が出土している。主体部2は、棺に相当する部分が1m程であるため小児を埋葬したものと考えられる。遺物は出土しなかった。

周辺の小規模調査では、14・15号墳の東側の尾根では、13号墳の周溝を検出したほか、須恵器片が出土した。14・15号墳の南東側では、土師器片が出土したが遺構は認められなかった。

まとめ 全調査区を通して表土の直下に黄褐色の粘質土の層を確認した。14・15号墳ではその下に墳丘の盛り土を確認し、小規模調査地点では明赤褐色の粘質土の地山を検出した。

14号墳は墳丘が一部崩れており古墳の形状を確認できなかったが、幅約10mの墳丘であり出土した鉄製品から古墳時代中期～後期頃であると考えられる。15号墳は、墳形は不明だが、墓壙を検出した平坦面は幅約12mを測る。墓壙の形状や遺物の出土状況から弥生時代後期後半～古墳時代前期であると考えられる。

(松谷友香)



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 峰山)

11. 佐屋利遺跡第3次

所在地 京丹後市峰山町荒山内

調査期間 令和4年5月12日～令和5年1月30日

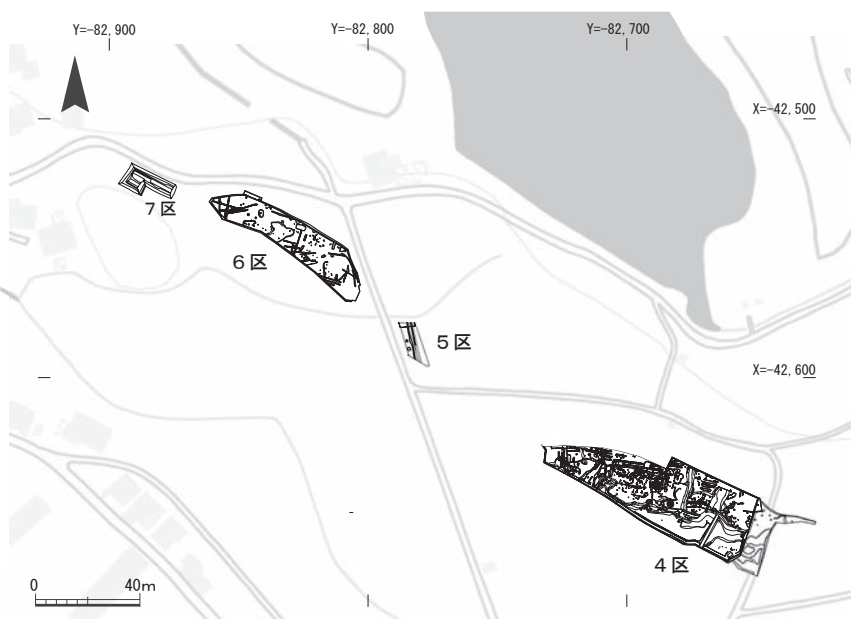
調査面積 3,240㎡

はじめに 佐屋利遺跡は竹野川右岸の微高地上に位置する弥生時代～中世の集落遺跡であることが明らかになっている(第1図)。今回の調査は国道312号道路新設改良事業に先立って実施した。同事業に伴う発掘調査は3年目である。なお、4～6区は本調査、7区は内容確認を目的とした小規模調査である。

調査概要 調査対象地に4～6区の調査区を設定し、調査を実施した。4区では、厚さ約40cmの耕作土直下に、古代末～中世初期の土師器・須恵器・輸入陶磁器などの遺物を多く包含する約20cmの土層を確認した。本層を重機および人力で除去し、掘立柱建物を構成する柱穴群、遺構が立地する微高地を区画する大溝2条(S D4001・4002・4008)、柱穴群を区画する溝3条(S D4003・4004・4005)、石組井戸2基(S E4006・4007)などの遺構と、4区を南東から南西へ横断する自然流路1条(N R4009)を検出した。大溝の埋土内に、弥生時代～鎌倉時代の遺物が散漫に包含されていたことから、中世以前の遺構面の有無を確認するため、面的に掘り下げを実施したが、明確な遺構は確認できなかった。5区は、遺物包含層および遺構面は、近現代の耕作等で全面的に地山面まで削



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 峰山)



第2図 調査区配置図

平され、遺構の検出や遺物の出土は認められなかった。6区は、東部は5区と同じく近現代の削平が著しく、遺物包含層の残存状況は不良で、ごく浅い古代末～中世初期の溝1条、柱穴群を検出するに留まった。一方、西部では耕作土直下に古代末～中世初期の遺物包含層が良好に残存していた。厚さ30cmの包含層を除去後、地山面直上で古代末～中世初期の柱穴群、溝1条を検出した。そのほか、調査区中央部で、土坑1基を検出した。7区は、厚さ約1mの現代の盛り土層を除去後、中世後期の土師器片、火鉢片を含む厚さ約2mの遺物包含層を確認し、斜面を削平して造られた平坦面とこれに伴う溝2条を検出した。

まとめ 今回の調査では、4区を中心に古代末～中世初期の遺構群を検出した。南は自然流路、東西を大溝で、平坦面を東西長約50m、南北長約20mに区画していることを確認した。区画内には、掘立柱建物を構成していたであろう柱穴群や、石組井戸が集中し、土地を区画した上での使い分けを意識していることが読み取れる。柱穴群の切り合い関係は複雑で、正確な規模を復元することは難しいが、柱穴群を取り囲む排水溝の規模から、1棟あたりの規模は2間×3間であったと推察できる。また、自然流路内に木柵井戸の残欠を検出したことから、現在は自然流路によって浸食されてしまっているものの、南側へ遺構の広がりも考えられる。6区でも同時期の遺物・遺構を確認しているが、遺構密度は4区に比べて低く、土地を区画する溝も確認できていないことから、4区と土地の使い方が明確に異なっていることが指摘できる。

以上の事柄から、4区が中郡盆地に臨む丘陵の端部に立地することや、6区とは異なり、区画を意識した遺構配置が認められることから、古代末～中世初期に本遺跡を中心とした地域を支配した有力者の居館であったといえよう。また、古代末～中世初期の4区・6区から中世後期の7区への移ろいは、古代末～中世における丹後地域の集落動態に迫る貴重な事例であるといえる。

(面 将道)



第3図 4区遺構平面図

12. カンジョガキ遺跡第3次

所在地 京丹後市大宮町^{すき}周枳地先
 調査期間 令和4年4月25日～令和5年2月27日
 調査面積 2,710㎡

はじめに 竹野川左岸の丘陵谷あい部扇状地上に位置する遺跡である。一般国道312号大宮峰山道路整備事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて調査を実施した。前年度検出した縄文早期末の自然流路N R06の南側延長部(A地区)、A地区の北側谷部・丘陵部(B地区)、南西側平坦部(C地区)とA地区東端の北側平坦部(D地区)である。

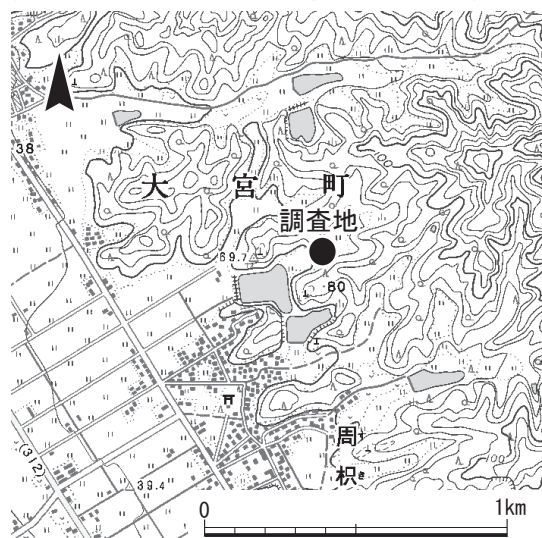
調査概要 A地区 調査地全体が圃場整備により大きく削平・攪乱を受けていた。南東へ延びる自然流路N R06は直角に近い角度で北に屈曲し、前年度検出した自然流路N R05に繋がる事が確認できた。流路の底面には流路に並行して3か所から木材が検出された。堆積状況から意図的に置かれたと考えられる。周囲から縄文土器小片が出土した。柱穴70基も検出したが、建物を復元できなかった。このほか、6条の自然流路を検出し、土師器・須恵器の細片が少量出土した。

B地区 検出された遺構は、竪穴建物2基、掘立柱建物2棟、横穴墓2基、溝2条である。残存状況の良い竪穴建物は一辺約5m、深さ0.6mの規模を持ち、内部床面には幅17cm、深さ8cmの周壁溝を有する。埋土から6世紀後半の遺物が出土した。掘立柱建物は、梁行2間分のみ確認した。横穴墓2基のうち1基を調査した。玄室長3m、玄室最大幅1.2mを測る。出土遺物から7世紀前半に築造されたものと考えられる。調査地外にも横穴墓3基が確認でき、掻き出されたと考えられる遺物が3か所から出土した。調査地西側斜面にも不規則な地形を呈する部分が認められ、横穴墓がさらに増える可能性がある。

C地区 直径7～8mの竪穴建物、浅い方形竪穴建物、幅約2mの土坑を検出した。包含層からは弥生土器・土師器・須恵器が出土した。

D地区 一辺約4mの方形竪穴建物、横穴墓の可能性ある落ち込みを検出した。

まとめ 今回の調査では、斜面地に営まれた竪穴建物と横穴墓を新たに検出した。谷中央部では圃場整備による改変が著しく、また、丘陵部においても開墾の痕跡があり、遺構の残存状況は良くない。しかしながら、丘陵斜面には、小規模な平坦地や横穴墓の前庭部であった微地形が残されており、今後調査を進めるうえで、これらの微地形を注意深く観察する必要を痛感した。(増田孝彦)



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 峰山)

13. 堀城跡・堀北古墳群

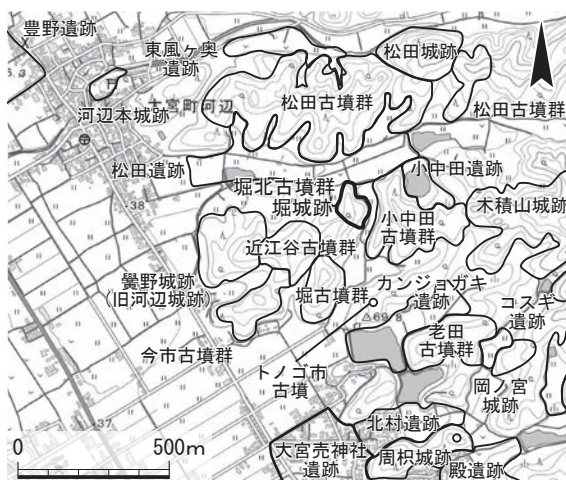
所在地 京丹後市大宮町^{こうべ}河辺

調査期間 令和4年8月1日～令和5年2月27日

調査面積 1,870m²

はじめに 堀城跡・堀北古墳群の調査は、一般国道312号大宮峰山道路整備事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて実施した。

堀城跡・堀北古墳群は竹野川中流域の右岸、大宮町河辺の独立丘陵の北東部尾根上に位置する。丘陵は花崗岩を基盤とし、丘陵の西側・北東側には扇状地が広がる。調査では丘陵先端の平坦面および斜面から丘陵裾部の平坦面まで、面的な調査を実施した。



調査位置図(国土地理院 1/25,000)

調査概要 今年度の調査では、丘陵上で堀城跡の堀切、土塁、帯曲輪などを、丘陵裾で柱穴や溝状遺構などを検出した。堀北古墳群に係る遺構は検出できなかった。

調査前の標高は65～68m、東側農道との比高は15mである。堀切と土塁は調査区南側で検出した。堀切は幅2.2m、深さ0.8mほどで、尾根筋に直交する。土塁は堀切を掘削した際の排土を幅

3.6m、高さ0.6mほど盛って造っている。帯曲輪は丘陵の西側で検出した。いずれも地山を削り出して幅1.8mほどに平坦面を造りだす。

丘陵東側裾部の平坦面では奈良時代以降の溝状遺構と柱穴を検出した。溝状遺構は幅0.2～0.25m、深さ0.15mで長さ8.0mである。柱穴は径約0.25m、深さ0.1～0.25mほどの円形で、南北方向に3基並んでおり、掘立柱建物の梁行の可能性がある。

まとめ 丘陵上では山城に伴う遺構を検出した。平坦面の傾斜は強く、比較的簡素な構造の出城と想定される。丘陵東側裾部には掘立柱建物が存在した可能性があり、丘陵北側に広がる松田遺跡との関連性がうかがわれる。(名村威彦)



調査地全景(上空から・上が南)

14. ^{にょう}女布遺跡第7次

所在地 舞鶴市女布

調査期間 令和4年9月20日～令和5年1月20日

調査面積 927㎡

はじめに 女布遺跡は西舞鶴地区南西側のなだらかな谷平野に立地する。弥生時代・飛鳥・奈良時代・平安時代・中世を中心とする遺跡である。調査は、府営農業競争力強化農地整備事業に先立ち京都府中丹広域振興局の依頼を受けて実施した。

調査概要 調査対象地内の3地区(北東部、中央部、南西部)の7か所に調査トレンチを設定し、発掘調査を行った。北東部には、3か所のトレンチを設けた。調査により自然流路や時期不明の水路を確認した。自然流路の北側では暗青灰色粘質土混じりの砂礫層を、南側では緑灰色粘性砂質土層を確認した。特に南側では、ピットを含む土色変化を多数確認した。古墳時代の遺構の可能性が高い。中央部付近に設けた3か所のトレンチでは、南側に向けて安定地盤が広がることを確認した。安定地盤の境界にあたる青灰色粘質土中からは20点近い木簡が出土した。判読可能な資料には「百石三升」や人名の墨書を記すものがある。時期を特定し難いが、近世の資料かと思われる。安定地盤面では多数のピットを確認した。南西部には、1か所のトレンチを設けた。包含層から緑釉陶器や銭貨2枚が出土した。1枚は「元豊通宝」で、1078年初鑄の北宋銭である。遺構面では多数のピットを検出した。

まとめ 北東部で検出した自然流路と推定される堆積の南側で確認した緑灰色粘性砂質土層は、第4次調査で指摘された女布谷中央にのびる帯状の微高地にあたると予想される。

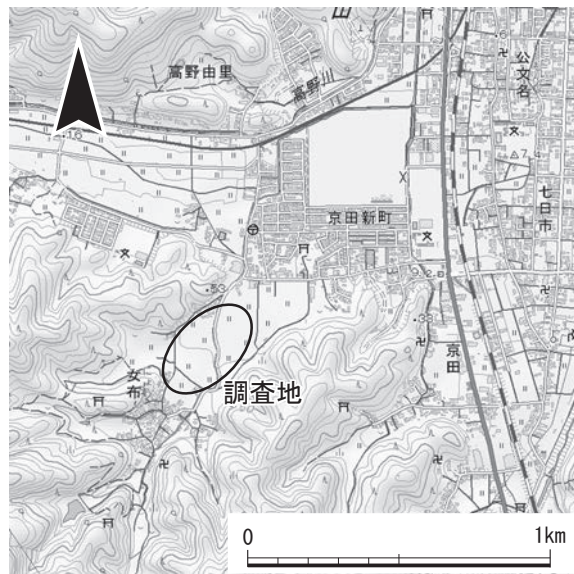
中央部付近では南側からのびる安定地盤が調査区付近でなくなる可能性が高い。ここより北側は自然流路に伴う湿地・谷地形を形成しているものと思われる。出土した多数の木簡は安定地盤の縁辺部にあたる湿地状地形に溜まったものと思われる。木簡を周辺部からの流れ込みとすると、遺跡の中心は南側台地上にあるものと予想される。

南西部では緑釉陶器や北宋銭などが出土した。

木簡の出土を勘案すると、遺跡内に古代から近世の公的な施設が存在する可能性が高い。(三好博喜)



出土木簡



調査地位置図(国土地理院 1/25,000)

15. 北野台遺跡

所在地 綾部市位田町

調査期間 令和4年9月8日～令和4年12月21日

調査面積 1,150㎡

はじめに 北野台遺跡は由良川中流域に広がる福知山盆地、由良川右岸の沖積地に位置する弥生時代～中世の集落遺跡である。北野台遺跡では、これまで綾部市教育委員会と京都府教育委員会が調査を行っており、今回が第7次調査となる。今回の調査は、府営農地中間管理機構関連農地整備事業に伴い、京都府中丹広域振興局の依頼を受けて実施した。調査地点は、遺跡の北部であり、低位丘陵南側台地の裾に位置している。調査地は2か所に分かれ、東側を第1トレンチ、西側を第2トレンチとした。

調査概要 第1トレンチ トレンチは、第6次調査地（京都府教育委員会）の南隣に位置する。トレンチの中央部北側から掘立柱建物S B01、素掘り溝S D02、焼土坑S X03を検出した。S B01は南北棟の掘立柱建物であり、梁間2間(6.1m)、桁行5間(12.0m)分を検出した。この建物は第6次調査地においても3間分が検出されたが、建物北端は未確認である。この結果、S B01の桁行は8間(19.2m)以上であることが判明した。建物の主軸は真北から西に12°振る。建物柱穴の多くには柱根が存在した。柱根は長いもので約1m、最大径0.29mを測る。柱根は10本を数えた。また、柱穴掘形埋土から奈良時代の須恵器蓋の破片が出土した。

第2トレンチ 第1トレンチの西約100mに位置する。トレンチ北壁に沿って沼状地N X20(黒褐色シルト)を検出した。シルト層から須恵器の供膳具が多く出土し、円面硯・転用硯、「息□」・「傳々」など墨書土器6点が含まれる。

まとめ 今回の調査では、由良川支流の瀬戸川右岸、丘陵に接する台地縁辺部から大規模な掘立柱建物S B01を検出した。古代の地方において、桁行規模が8間を超える建物は、寺院か官衙関連施設に存在する。今回の検出の建物(S B01)は、瓦の出土が皆無であること、南北棟の大型建物は寺院にはみられないことから、何鹿郡内に設けられた官衙関連施設の一つと考えられる。出土遺物に煮炊き具が少なく供膳具が多いことや、識字層の存在を示す円面硯・転用硯・墨書土器の出土は、官衙関連施設の存在を補強するものである。

(竹原一彦)



調査位置図(国土地理院 1/25,000)

16. 平野古墳群

所在地 亀岡市千歳町千歳

調査期間 令和4年11月8日～令和5年1月6日

調査面積 100m²

はじめに 平野古墳群は、亀岡盆地北東部の丘陵斜面に位置し、龍谷大学考古学研究室によって分布調査が行われ、51基の古墳が確認されている。また、表採遺物などはないものの、露出している石材やその状況から、横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳で構成される古墳時代後期の群集墳として位置づけられている。なお、発掘調査は今回が初めてである。

調査は、亀岡市千歳町内における中谷川通常砂防(防災安全補正)業務委託・中谷川緊急自然災害防止対策業務委託に伴い京都府南丹土木事務所の依頼を受け実施した。

調査概要 千歳町の丘陵を流れる中谷川流域の川沿いにあたる。川沿いに存在する上流側と下流側にある盛土状地形が古墳の可能性があることから調査を実施することとなった。

上流側での調査は、近接地の古墳番号が付されていない盛土状地形の裾部に工事範囲が及ぶことから実施した。その結果、トレンチ北東部の盛土状地形付近では6世紀後半の蓋杯や短頸壺などの須恵器と10世紀代の土師器片が出土した。しかし、古墳の周溝などの明確な遺構は確認できなかった。そのほか近年のものと考えられる堰堤を検出した。

下流側での調査は、古墳の可能性がある盛土状地形に部分的な断割りをいくつか設定し調査を行ったが、下流側の盛土状地形に関しては中谷川を浚渫した際に盛られた隆起である可能性が高いことがわかった。そのため、盛土状地形については全面調査を行っていない。



調査位置図(国土地理院 1/25,000 亀岡)

まとめ 今回の調査の結果、上流域の盛土状地形は、出土した須恵器から6世紀後半の古墳になる可能性が高い。はじめて、遺物から平野古墳群が、古墳時代後期後半の古墳群であると位置付けることができた。

また、上流側で検出した堰堤や下流側の盛土状地形から、近年(昭和30年以降か)に行われた中谷川の水害対策の様子を知ることができた。堰堤の構築や浚渫が行われる前の中谷川は今よりさらに蛇行し、深さも浅かったことがわかり、水害対策など昔から治水に関して苦労してきた様子がうかがえる。
(村田和弘)

17. 井手遺跡第7次

所在地 亀岡市本梅町西加舎

調査期間 令和4年5月17日～令和5年3月6日

調査面積 5,470㎡

はじめに 井手遺跡は、園部川の支流・本梅川により形成された本梅盆地西側に位置し、行者山・半国山間の扇状地上に営まれる現在の集落範囲にほぼ重なる範囲の遺跡、散布地として周知されている。令和3年度までに、6回にわたり亀岡市教育委員会及び当調査研究センターによる調査が行われており、令和4年度は、亀岡市教育委員会が行った小規模調査において、遺構及び遺物を確認した調査区を面的に調査した。また、面的に調査した調査区の西側で小規模調査区を設置し、調査を実施した。

調査概要 小規模調査区では、15か所にトレンチを設け、遺構及び遺物の有無を確認した。うち2か所のトレンチで柱穴・土坑等の遺構を検出したため、令和5年度に面的調査を行うこととなった。その他のトレンチについては、顕著な遺構・遺物を認められなかった。

面的調査は6調査区で調査を行い、柱穴、土坑、鋤溝、自然流路、木樋などを確認した。各調査区で確認した柱穴のうち、掘立柱建物を復元できるものが少なくとも8棟ある。柱穴内から出土した遺物は土師器皿、瓦器碗を中心とする中世初期段階のものである。また、複数の用途不明土坑があり、直径2～3m程度の比較的大きな土坑内に10～20cm大の礫が混入している事例もあった。土砂の流入を受けやすい場所にあり、流入した礫の廃棄土坑的な意味合いを持つ可能性が高い。自然流路も複数の調査区で確認しており、流路の肩に当たる箇所には杭列を確認した。流路埋土の最上層からは、土師器皿、瓦器碗などの中世初期段階に相当する遺物が多量に出土し、掘立柱建物の居住時期に流路内に不要な土器類を廃棄し埋め立てたと考えられる。埋土の2層目以降では8世紀頃の遺物も確認できたが、その時期に相当する建物等の遺構は確認できなかった。その他、一部の調査区では近世以降の農地の境界に造成した畔状の盛土及び杭列を検出した。

まとめ 井手遺跡第7次調査では、第6次調査に引き続き、当該地域における中世初期段階の集落形成を紐解く成果を得られた。居住域と耕作域の区別化がはっきり見てとれ、耕作地の改良を行っていることも推定される。次年度も引き続き調査を行うため、集落の様相について検討を進めていきたい。

(山本 梓)



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 植生)

18. 與能遺跡第2次

所在地 亀岡市曾我部町寺恋谷

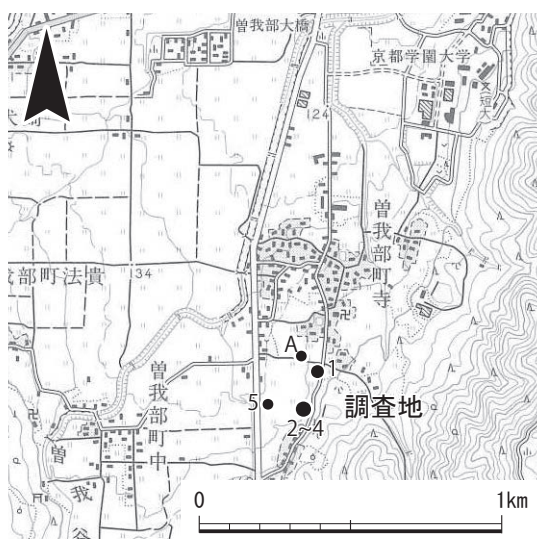
調査期間 令和4年11月7日～令和5年2月27日

調査面積 397㎡

はじめに 與能遺跡は、亀岡盆地南部の曾我谷川等によって形成された扇状地上に立地する。この周辺では、白鳳時代創建の與能廃寺の存在が想定され、近隣には延喜式内社である與能神社が位置する。その御旅所付近で、開墾時に本薬師寺系の軒丸瓦1点と軒平瓦2点が採集されている。また、付近には礎石が残されている。

これまでに、亀岡市教育委員会により調査が行われており、今回の調査では、5か所の小規模調査(1～5トレンチ)と、1か所の本調査(A地区)を行った。なお、今回の調査は、国営緊急農地再編整備事業に伴い農林水産省近畿農政局の依頼を受け実施した。

小規模調査の概要 1トレンチでは、小規模な溝や土坑を検出したが、遺構は希薄であった。遺物包含層には、奈良時代から中世の遺物が包含されており、中世以降に形成されたと考えられる。このトレンチの北東側周辺に奈良時代から中世の集落が存在した可能性がある。2トレンチは、1トレンチより南に約180mの丘陵先端部に設定した。小規模な柱穴列や土坑を検出したが、調査地が狭小なため拡張調査はできなかった。3・4トレンチは、2トレンチの南側に設置し調査を実施したが、遺構は検出されなかった。小規模調査1～4トレンチは、東から西に延びる丘陵先端に位置しており、丘陵先端を整地し、平坦面を造成されたと考えられる。これ以降、時期は明確ではないが、耕作地とするため整地が行われ、遺構の多くが削平されたと考えられる。



調査位置図 (国土地理院 1/25,000 法貴)

小規模調査5トレンチは東側の平地に位置し、調査地は農地整備工事の掘削深度の関係上、近現代の盛土を確認したのみとなった。

小規模調査全体で遺構は極めて希薄で、出土遺物も極めて少量であった。このことから、これらの小規模調査区は、拡張して調査する必要がないと判断された。

本調査の概要 遺構は確認できなかったものの、遺物包含層内から土師器、須恵器、瓦器、陶器の破片が出土した。おそらく東側からの高所から流入したものと考えられる。今後実施予定の近隣の調査地に期待したい。

(村田和弘)

19. 西加舎遺跡第7次

所在地 亀岡市本梅町西加舎中牧

調査期間 令和4年11月7日～令和5年2月3日

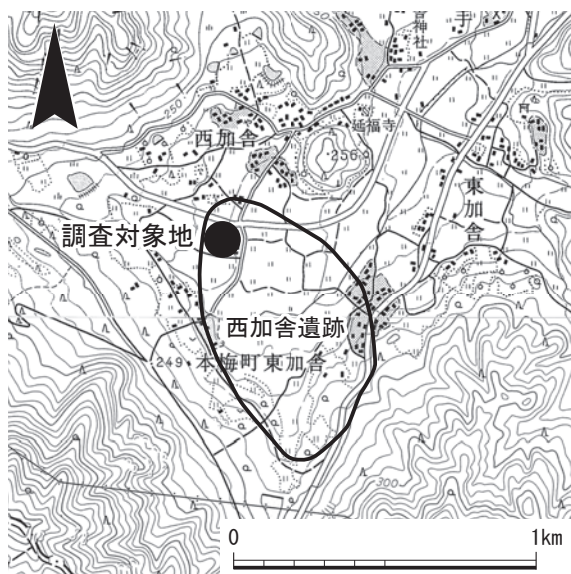
調査面積 1,627㎡

はじめに 西加舎遺跡は、亀岡市西側に所在する本梅地区西側の本梅川によって形成された扇状地に位置し、弥生時代から中世にかけての散布地とされる。これまで6次にわたる調査が行われたが、小規模な調査が多く、遺跡の具体的な様相は不明である。調査対象地は、遺跡の北東端付近にあたる。なお、今回の調査は、国営緊急農地再編整備事業に伴うものである。

当初、調査対象地の北東側での本調査(A地区)と、南西側での遺跡の状況を確認する小規模調査(1～3トレンチ)を開始した。その後、小規模調査の1・3トレンチで遺構の一部を確認したため、関係機関と協議の上、両調査区を拡張し、新たにB地区として本調査を実施した。

調査概要 A地区では、東西方向の自然流路NR02を検出した。幅は4～10mを測り、下流の東側で広がる。深さは、最深部で1.5mを測る。検出長は約28mである。この流路跡の東側北岸寄りの地点で、投棄されたと考えられる土器溜まりSX01を検出した。SX01からは土師器甕・高杯や須恵器杯身・甕などが出土した。土師器甕片は細片が多く、人為的に破碎されたとも考えられる。川辺での祭祀等の後、破碎して投棄された可能性も考えられる。古墳時代中期後半頃のものである。

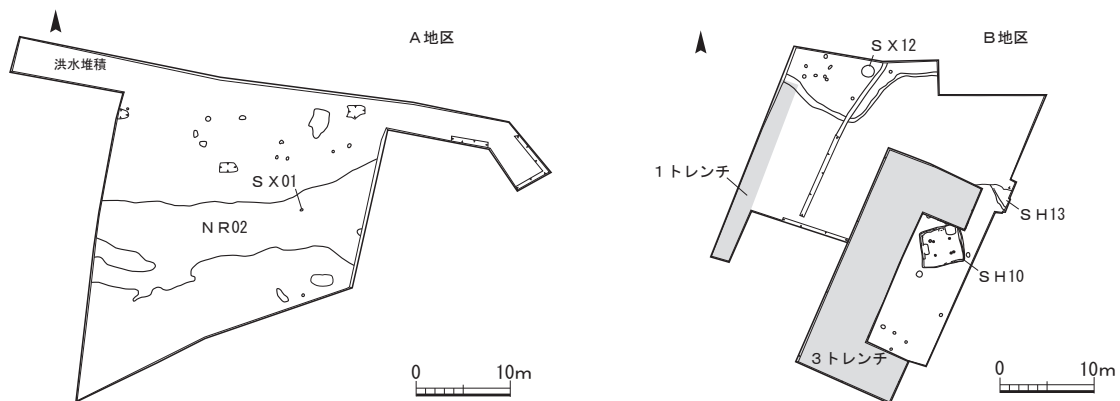
B地区では、竪穴建物2棟を検出した。竪穴建物SH10は、一辺約5mの方形建物である。北辺東側と西辺中央に貯蔵穴と考えられる土坑(写真2参照)がある。北辺東側の土坑(SK11)からは、製塩土器が複数個体まとまって出土し、西辺中央の土坑(SK16)からは、手捏ね土器などが



調査位置図(国土地理院 1/25,000 増生・妙見山)

出土した。製塩土器は、北辺東側の土坑以外でも建物内の各所で出土しており、大阪湾沿岸地域のものと思われる。この建物からは古式土師器の甕や高杯などが出土しており、須恵器は出土していないが、製塩土器の形態から、時期は古墳時代中期頃と考えられる。

竪穴建物SH13は、その大部分が近世以降の水田造成と土石流で削平されており、詳細は不明である。建物は方形と考えられ、周壁溝をもつ。建物内から古式土師器の甕、手捏ね土器が出土した。土師器甕の調整は丁寧で、SH10出土の甕に比べて器壁はかなり薄い。



A・B地区遺構配置図

時期は古墳時代前期と考えられ、SH13がSH10にやや先行するものとみられる。このほか、B地区では、中世の遺物包含層や近世の耕作に伴うと考えられる水溜め遺構SX12などを検出した。

まとめ これまで本梅地区では、古墳時代の顕著な遺構は確認されていなかったが、今回の調査で古墳時代前期及び中期の竪穴建物、古墳時代中期の自然流路などを検出し、西加舎遺跡において古墳時代に集落が営まれていたことを確認し、遺跡の具体的な様相の一端が明らかになった。本梅地区の歴史を考える上で、重要な調査成果と言える。

出土遺物で注目されるのは、竪穴建物SH10から複数個体出土した製塩土器である。この製塩



写真1 A地区自然流路NR02(東から)

土器は、大阪湾沿岸地域のものと考えられ、そこで生産された塩がこの地に搬入されていたことを示す遺物と言える。この遺跡は、内陸部の平地である亀岡盆地と北摂(大阪府北部)山地を経由して大阪湾沿岸地域を結ぶ経路上に位置しており、古墳時代中期におけるその経路の存在を具体的に示す遺物とも言える。

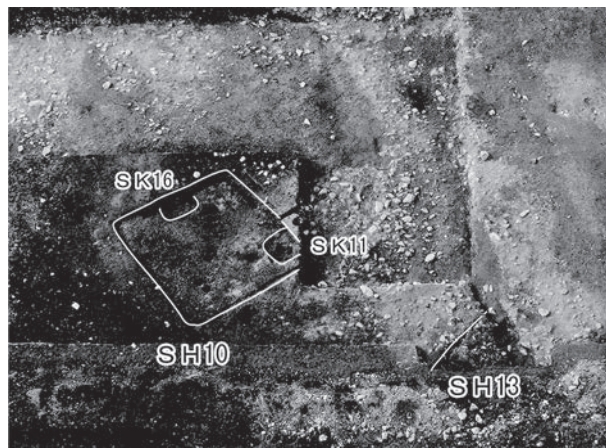


写真2 B地区竪穴建物SH10・SH13(南東から)

また、祭祀に伴うと考えられる手捏ね土器が竪穴建物内から出土しているのも注目される。SH10では複数個体、部分的な残存状況のSH13でも1個体出土している。これらの土器が、建物の性格を物語る可能性も考えられるが、それについては、今後の検討課題である。

(引原茂治・松井 忍)

20. ざくろ 柘榴川原遺跡

所在地 相楽郡精華町柘榴・乾谷地先

調査期間 令和4年12月8日～令和5年2月28日

調査面積 900㎡

はじめに 今回の調査は、国道163号精華拡幅事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けて実施した。柘榴川原遺跡は相楽郡精華町柘榴・乾谷地先に所在し、山田川左岸の河岸段丘上に立地している。当該遺跡では、遺物の散布が確認されていたが、過去に調査例はなく、本発掘調査が第1次調査となる。

調査概要 調査地は遺跡範囲の中央部分に位置する。調査トレンチは国道163号の南側に5か所(1～5トレンチ)、北側に4か所(6～9トレンチ)の合計9か所に設定した。

2・5トレンチでは、近世から室町時代の水田と耕作土を検出した。5トレンチでは水田の畦畔と杭列を検出した。下層では耕作土を検出したが、畦畔は検出されなかった。また、土器、磁器、陶器、木製品などの遺物がわずかに出土した。

3トレンチの東側では、杭列を検出した。3トレンチの東側は浅い谷地形であり、谷の中に杭を打ち込み、木製の構造物を構築していた。

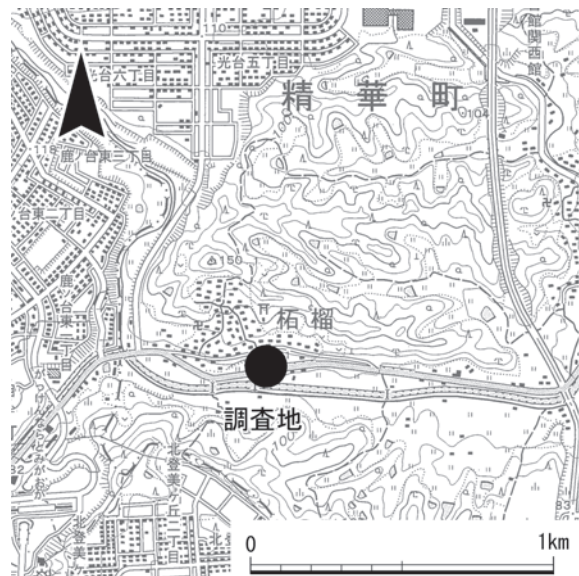
その他のトレンチからは砂礫層を検出したが、遺構・遺物は検出されなかった。

まとめ 今回の調査では、2・5トレンチで、近世から室町時代の水田と耕作土を検出し、耕作地であることが判明した。3トレンチでは、杭を打ち込んで木製構造物を構築していた。3トレンチの東側は、現在も柘榴集落から山田川に向かう水路となっていることから、現在の水路の前身となる遺構と推測される。

各トレンチでは、砂礫層が厚く堆積している状況を確認したことから、周囲と同様に、山田川により形成された河岸段丘の一部であることが判明した。

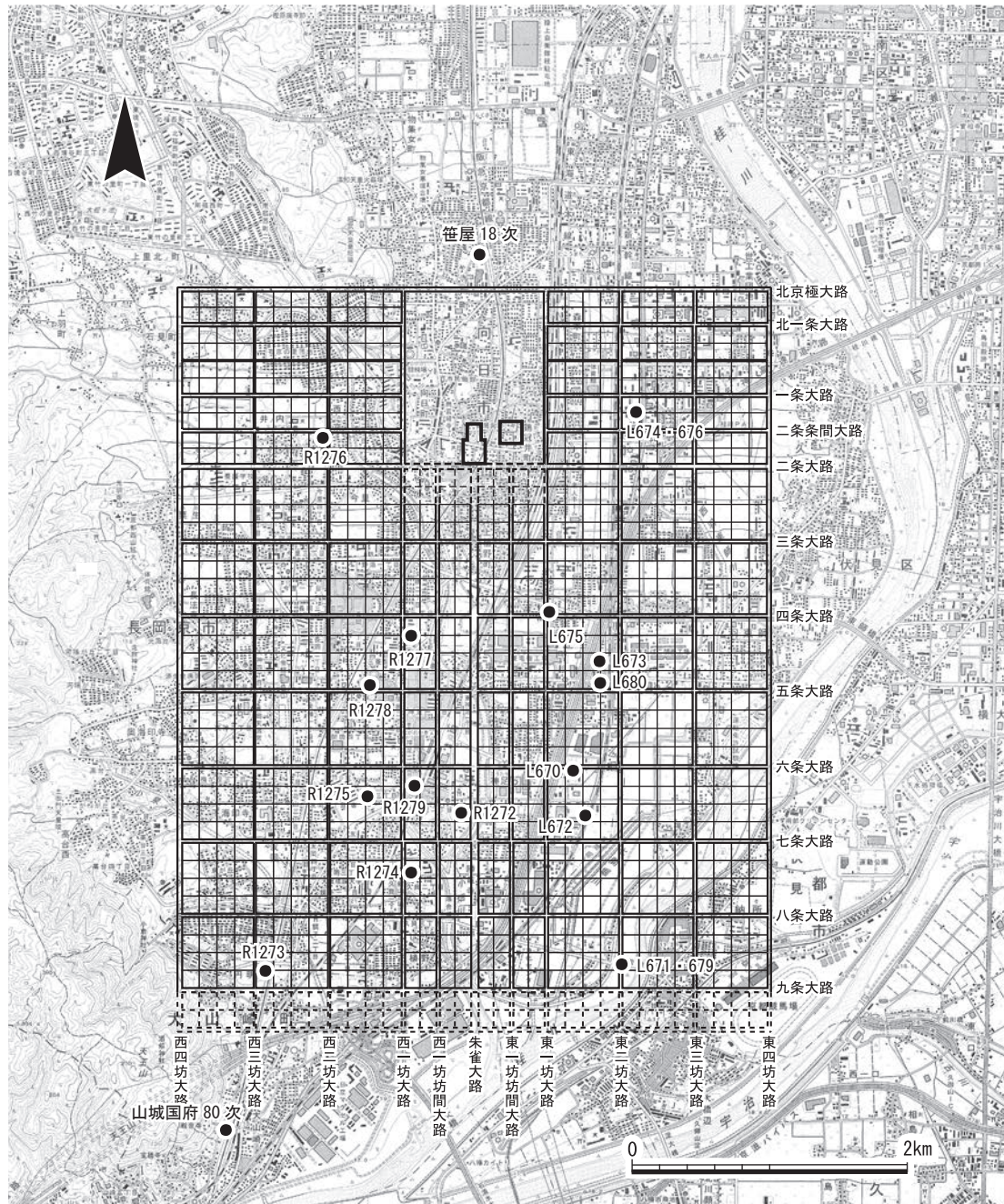
今回の調査で、耕作地として利用された地点が明確に確認でき、近世以降の洪水砂で河岸段丘が埋没した後、水田などに利用される現景観に至る土地の履歴が明らかになった。

(福山博章)



調査位置図(国土地理院 1/25,000 奈良)

長岡京跡の発掘調査情報の交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的に、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。令和5年1月から令和5年7月までの例会では、宮域0件、左京域9件、右京域8件、京域外2件の合計19件の調査報告があった。その中で、調査の終了したものを中心に略述する。



調査地位置図(1/50,000)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊复原図を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

宮域 この間、宮域での調査は実施されていない。

左京 **左京670次調査**(長岡京市神足・雲宮遺跡)では六条大路の南北両側溝が確認され、六条大路の南側の宅地(左京七条二坊九町)内から宅地を囲む柵列、北側の宅地(左京六条二坊五町)内から井戸などが確認された。南北両側溝からは、土器等が一定量出土している。北側の宅地内からは土器とともにふいご羽口、取鍋^{とりべ}、鋳型が出土している。同じ宅地内から検出された井戸は、掘形の直径1.2m、深さ1.4mを測り、井戸底部には、櫃^{ひつ}と曲物が井筒として転用された状態で出土した。井筒の外側からは和同開珎が出土している。**左京671次・679次調査**(京都市伏見区淀水垂・大下津町遺跡)は、昨年度から始まった桂川の河道拡幅工事に伴う大規模調査である。平安時代の流路から重圈文軒丸瓦と皇朝十二銭が出土した。前年度検出した室町期の堀からは、昨年度に引き続き卒塔婆などが出土した。江戸時代、明治時代の水制遺構が検出され、江戸時代の水制遺構には船材が再利用されていた。**左京672次調査**(長岡京市神足・雲宮遺跡)では東一坊坊間東小路が検出された。小路の南半は洪水層に覆われていた。**左京674次調査**(向日市鶏冠井町・鶏冠井遺跡)では、二条条間北小路の南北測溝が検出された。**左京675次調査**(向日市上植野町)では、深さ0.6mの東一坊大路東側溝が検出され、土器・瓦類が出土した。

右京 **右京第1273次調査**(大山崎町円明寺・久保川遺跡)の調査では、奈良時代の土坑群が検出され鳥の造形もつ須恵器などが出土した。**右京第1278次調査**(長岡京市開田)では、西二坊坊間小路東側溝の可能性のある南北溝が検出された。

京域外 **山城国府第80次調査**(大山崎町大山崎)では、大山崎瓦窯跡の北側で調査を実施したが、瓦窯跡の広がり確認できず、瓦窯跡は既発見のC支群を北端とする可能性が高まった。宮の北に位置する**笹屋遺跡第18次調査**(向日市寺戸町)では、長岡京期の遺物を含む層が良好に残されていることが確認された。

(肥後弘幸)

現地公開

(令和5年1月～令和5年7月)

当調査研究センターでは、埋蔵文化財の発掘調査成果を広く府民の方々に報告し、地域の歴史への関心を深めていただくため、当調査研究センターが実施している京都府内の発掘調査の成果について、現地説明会などの現地公開を行っている。



法貴古墳群現地説明会の状況

現地説明会

法貴古墳群 国道423号・法貴バイパスの建設に先立って昨年度から調査を開始している。亀岡盆地は、古墳時代後期の群集墳が府内でも多い地域のひとつである。法貴古墳群は、現状で横穴式石室を埋葬施設とする66基からなる古墳群で、今回5基の古墳を対象に調査を実施していた。

気温30度を超える暑さの中、56名の方々に、6世紀中頃の幅2.0m・長さ2.4mの方形に近い平面形の玄室をもつ横穴式石室と7世紀の奥壁幅0.7mの無袖の小規模な横穴式石室などを見学いただいた。

なお、当調査研究センターの実施した現地説明会等資料については、ホームページで公開しているので参照願いたい。



無袖の小規模な横穴式石室

普及啓発事業

(令和5年1月～令和5年7月)

当調査研究センターでは、文化財活用の一環として埋蔵文化財の発掘調査成果や最新の研究成果を分かりやすく紹介し、府民の方々に文化財に対する理解をいっそう深めていただくため、埋蔵文化財セミナーや発掘調査速報展をはじめ、出前授業、「関西考古学の日」関連事業などの普及啓発活動を行っている。

新型コロナウイルスによる感染症が、2類から5類に移行したが、感染拡大防止の観点から、引き続き埋蔵文化財セミナー席数に対して定員を2分の1以下にするなど工夫を行っている。

なお、埋蔵文化財セミナーと展覧会の実施、普及啓発冊子「もっと知りたい京都の遺跡」の作成にあたっては、京都府教育委員会からの委託事業として実施している。

(1)埋蔵文化財セミナー

埋蔵文化財セミナーは、京都府教育委員会と共催で年3回実施している。

第151回埋蔵文化財セミナー 一昨年度調査成果を公表した栢ノ木遺跡(井手寺跡塔跡)について、整理作業が進み新たな知見も明らかになってきた。それを機に令和5年2月25日(土)に府南部からも交通の便の良い京都市呉竹文化センターホールにて「奈良時代創建の大寺院－井手寺と大安寺－」と題してセミナーを実施した。

まず、報告1として、当調査研究センター福山博章主任が、「橘諸兄建立の大寺院井手寺塔跡の発掘調査」として、井手寺跡の推定寺域の外から良好な状態で新たに見つかった塔跡の調査成果について報告した。次いで、報告2として、塔院区画をもつなど井手寺と共通点の多い平城京の大寺院大安寺の発掘調査の成果について、奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センターの原田憲二郎活用係長に報告いただいた。その後、奈良時代の寺院研究の第一人者である上原真人理事(京都大学名誉教授)から、「橘諸兄と井手寺」と題して橘諸兄の活躍した奈良時代中頃から橘嘉智子が嵯峨天皇の皇后になる平安時代前期までの歴史



上原真人理事講演風景



座談会実施状況



京都府立図書館での展示状況

背景をもとに、井手寺塔跡の意義について講演いただいた。最後に、発表者3名による座談会を実施して好評のうちに終了した。参加者は206名と多数であった。

(2)展覧会等

京都府立図書館連携展示 令和2年度から開始した当該事業について、令和5年2月3日から3月15日の間、「発掘調査が語る近世「京」のすがた－文化庁移転記念－」と題して、新庁舎建設をはじめとする府庁周辺の調査成果による出土品の展示を行った。参加者は総数812名である。この間、加藤雄太調査員による同名の講演会を3月4日に府立図書館で実施している。

(3)普及啓発誌「もっと知りたい京都の遺跡」の刊行

令和4年度2冊目(第12号)として、「三十石夢乃通路－伏見の賑わいと水上交通－」を刊行した。

センターの動向

(令和5年1月～令和5年7月)

- 1 6 京都新聞ジュニアタイムズが法貴古墳群(亀岡市)を現地取材
- 15 令和5年4月採用職員採用選考試験(第2次審査)
- 20 女布遺跡(舞鶴市)現地調査終了(令和4年9月20日～)
- 28 令和4年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック研修会講師派遣「城陽市小樋尻遺跡の調査について」福山主任
- 30 佐屋利遺跡(京丹後市)現地調査終了(令和4年5月9日～)
- 2 3 当センター・京都府立図書館連携展示「発掘調査が語る近世「京」のすがたー文化庁移転記念ー」
展開始(於：京都府立図書館 ～3月15日)参加者812名
- 8 第2回埋蔵文化財担当職員講習会(文化庁主催、於：長崎県)面主任出席(～9日)
- 9 増田理事柘榴川原遺跡(精華町)現地指導
- 12 京都府立京都学・歴彩館共同研究「京都学・丹後の文化資源」中間報告会(於：京都学・歴彩館)
高野課長補佐発表
- 15 第1回向日市歴史的風致維持向上協議会(於：向日市文化資料館)阿部事務局長出席
- 17 令和4年度第2回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(於：八尾市)小池課長、
筒井・高野課長補佐出席
- 22 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)
- 24 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(於：大阪市)阿部事務局長、肥後課長補佐出席
法貴古墳群(亀岡市)現地調査終了(令和4年5月6日～)
- 25 第151回埋蔵文化財セミナー『奈良時代創建の大寺院ー井手寺と大安寺ー』(於：京都市)講師：上
原理事、福山主任ほか 参加者206名
- 27 カンジョガキ遺跡(京丹後市)現地調査終了(令和4年4月25日～)
立山古墳群(京丹後市)現地調査終了(令和4年10月19日～)
柘榴川原遺跡(精華町)現地調査終了(令和4年12月5日～)
- 28 幾地城跡(与謝野町)現地調査終了(令和4年11月29日～)
- 3 4 京都府立図書館講演会講師派遣「文化庁移転にともなう発掘調査で見た京都のすがた」「加藤調
査員(於：京都府立図書館) 参加者58名
- 22 第45回理事会(於：京都市)
長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)
- 4 1 辞令交付式
- 20 市町(組合)記念物保護行政担当者会議(於：京都府庁)小池課長、筒井課長補佐、細川副主査出席
- 21 八幡の歴史を探究する会講師派遣「木津川河床遺跡の調査」高野課長補佐(於：八幡市)
- 26 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)

- 5 8 小中田古墳群(京丹後市)、幾地城跡(与謝野町)、稚児野遺跡(福知山市)、法貴古墳群(亀岡市)現地調査開始
- 9 松田古墳群(京丹後市)現地調査開始
- 12 石原遺跡(精華町)現地調査開始
- 16 與能遺跡(亀岡市)現地調査開始
- 17 千代川遺跡(亀岡市)現地調査開始
- 19 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議事前会議(於：当調査研究センター)小池課長、肥後・筒井・高野課長補佐出席
- 22 芝山遺跡(城陽市)現地調査開始
- 24 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)
- 25 井手遺跡(亀岡市)、春日部遺跡(亀岡市)現地調査開始
- 30 監事監査(於：当調査研究センター)
- 6 7 第46回理事会(於：京都市)
- 9 令和5年度第1回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(於：京都市)小池課長、高野・筒井課長補佐出席
- 15 全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(於：和歌山県)阿部事務局長、肥後課長補佐出席(～16日)
- 18 京都府立京都学・歴彩館「丹後の文化資源」共同研究(於：歴彩館)高野課長補佐出席
- 19 京都府庁開庁記念式典(於：京都市) 阿部事務局長出席
- 23 第15回評議員会(於：京都市)
第47回理事会(書面開催)
第1回恭仁宮跡調査専門家会議(於：京都市)筒井課長補佐出席
- 28 長岡京連絡協議会(於：センター)
- 29 増田理事、京都府立大学小滝篤夫非常勤講師稚児野遺跡(福知山市)現地指導
- 7 8 文化財写真技術研究会「デジタル技術の明暗」講師派遣(於：奈良市)武本主任
京都府立京都学・歴彩館「洛南の文化資源」共同研究会(於：歴彩館)小池課長、引原副主査出席
- 15 法貴古墳群(亀岡市)現地説明会 参加者56名、菱田・森下理事現地指導
- 22 考古学研究会第238回関西例会講師派遣 「京丹後市佐屋利遺跡の発掘調査について」面主任(於：長岡京市)
- 24 明治大学黒曜石研究センター能城修一教授、京都大学総合博物館村上由美子教授小樋尻遺跡出土遺物調査指導

編集後記

今年は、例年以上の猛暑となりました。7・8月の京都市の猛暑日は過去最多の38日を数えました。非常に厳しい気候の中、発掘調査現場で作業に従事いただいた方々に心から感謝いたします。

ここに『京都府埋蔵文化財情報』第145号が完成しましたので、お届けします。本号は、研究ノート4本、資料報告1本と充実した内容になっておりますので、ご一読いただきますようお願いいたします。

今後ともみなさまのご指導・ご鞭撻をよろしくお願いします。

(編集担当 肥後弘幸)

京都府埋蔵文化財情報 第145号

令和5年8月31日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷





KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER